

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第204集

# 中曾根遺跡発掘調査報告書

公舎建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 中曾根遺跡発掘調査報告書

公舎建設関連遺跡発掘調査

# 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包含地があり、7,000ヵ所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に残していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置を取ってまいりました。

本報告書の中曽根遺跡は、二戸市を流れる馬淵川の河岸段丘に立地し、平成4年度の発掘調査によって縄文時代の狩場・中近世の集落跡の一部であることが明らかになりました。陥し穴状遺構や掘立柱建物跡は段丘の東縁部に立地し、溝跡や土坑とともに集落景観の一端を知ることができる資料であります。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に御協力、御援助を賜りました岩手県総務部施設管理課、二戸市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工 藤 巖

# 例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸市石切所字中曽根13—11ほか、に所在する中曽根遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、二戸地区中曽根合同公舎の建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と岩手県総務部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はJ E 09—0314、遺跡略号はN S —92発掘調査面積1300㎡である。
4. 発掘調査の期間は、平成4年4月10日～5月31日、整理期間は平成4年11月13日～平成5年3月31日である。
5. 野外調査および室内整理は高橋正之、高橋英樹が担当した。
6. 本報告書の執筆は高橋正之が担当した。
7. 石質の鑑定は佐藤二郎氏に依頼をした。
8. 発掘・整理・執筆にあたっては下記の方々に御協力、御指導いただいた。  
小田野哲憲氏（岩手県教育委員会文化課）、関豊氏（二戸市教育委員会）
9. 野外調査では荒谷キエさん他10名、室内整理では浅沼光子さん他4名の御協力を得た。
10. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

# 本文目次

## 例言

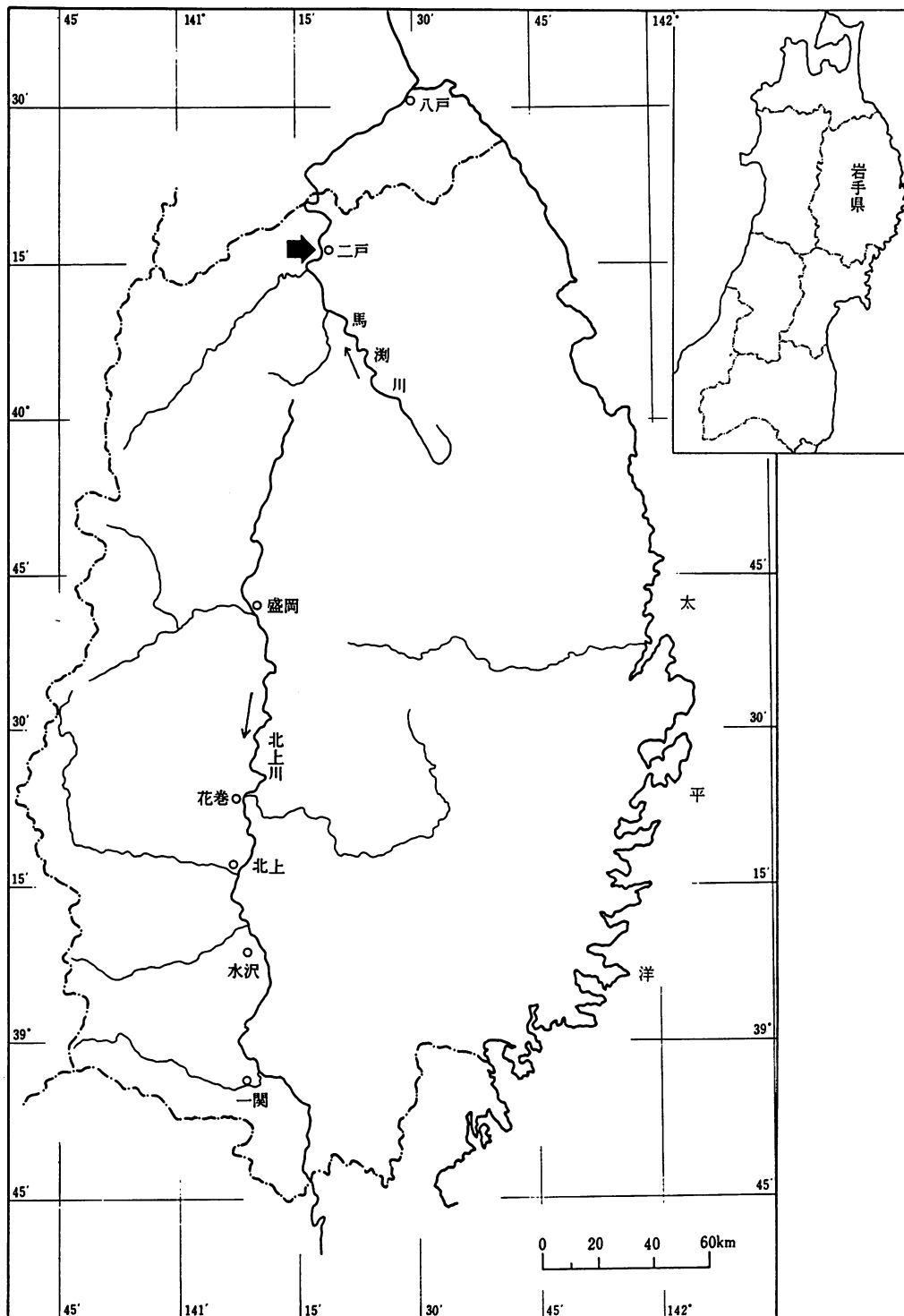
I. 調査に至る経過	3	2. 遺物	22
II. 遺跡の位置と環境	4	(1) 土器	22
1. 遺跡の位置	4	(2) 土製品	22
2. 遺跡周辺の地形	4	(3) 石器	22
3. 馬淵川流域の段丘群	4	V. まとめ	28
4. 周辺の遺跡	5	1. 遺構	28
5. 基本層序	10	(1) 土坑	28
III. 調査の方法と整理	13	(2) 陥し穴状遺構	28
1. グリッド設定	13	(3) 溝跡	28
2. 粗掘と精査	13	(4) 掘立柱建物跡	28
3. 遺構の命名と実測	15	2. 遺物	29
4. 野外における写真撮影	15	(1) 土器	29
5. 室内整理	15	(2) 土製品	29
IV. 遺構と遺物	15	(3) 石器	29
1. 遺構	15	引用・参考文献	30
(1) 土坑	15		
(2) 陥し穴状遺構	16		
(3) 溝跡	18		
(4) 掘立柱建物跡	20		

# 図版目次

第1図	岩手県における遺跡の位置	1
第2図	遺跡の位置と周辺の地形	2
第3図	馬淵川流域の地質図	7
第4図	遺跡周辺の段丘区分図	8
第5図	周辺の遺跡	9
第6図	中曽根遺跡の主要地点柱状図	12
第7図	中曽根遺跡遺構配置図	14
第8図	G II・J III土坑・H II陥し穴状遺構	17
第9図	1・2・3・4号溝跡	19
第10図	掘立柱建物跡	21
第11図	遺構外出土遺物（縄文土器、円盤状土製品）	24
第12図	遺構外出土遺物（石器）	25
第13図	遺構外出土遺物（石器）	26
第14図	遺構外出土遺物（石器）	27

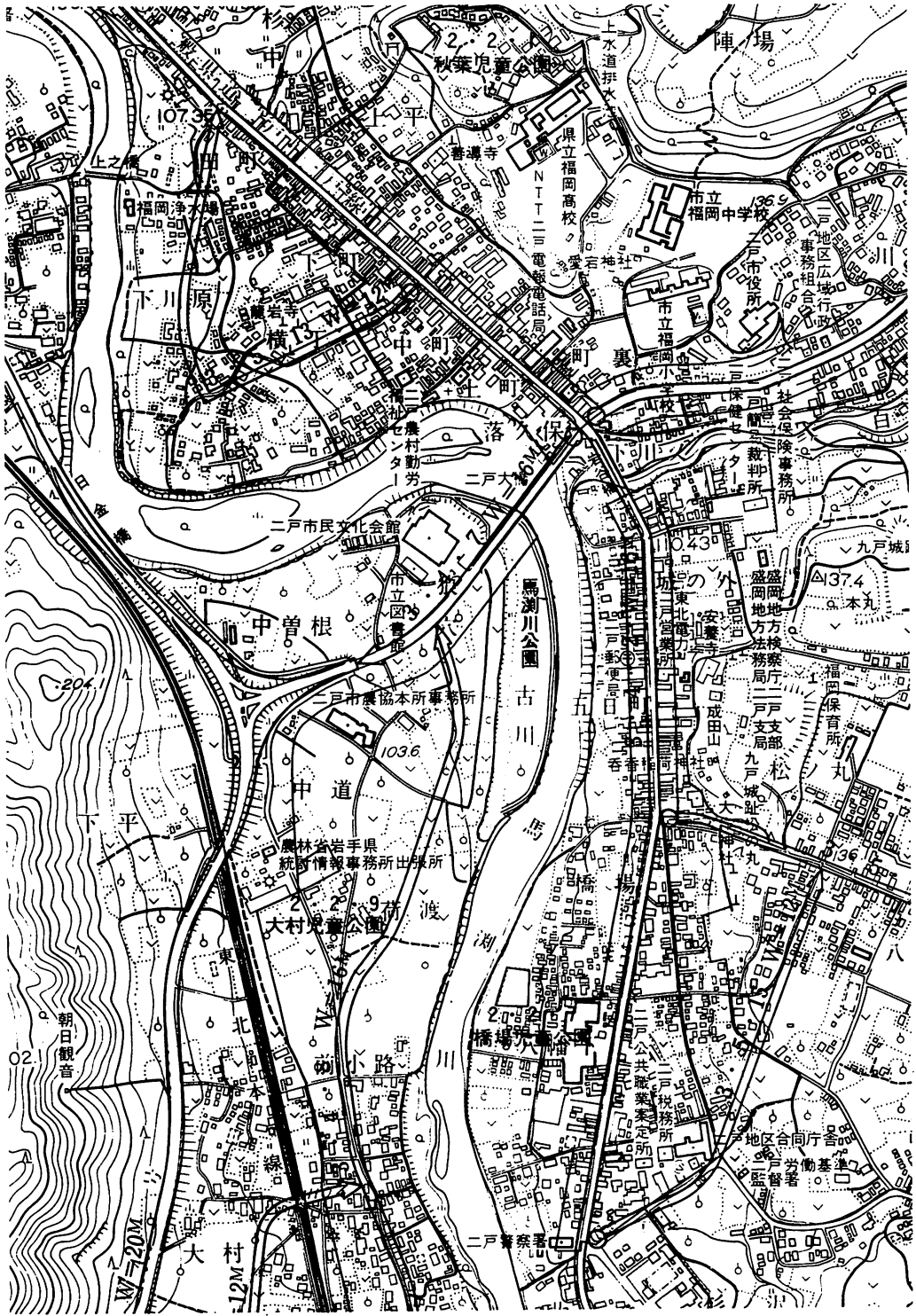
# 写真図版目次

写真図版 1	中曾根遺跡遠景	32
写真図版 2	粗掘作業風景	33
写真図版 3	C II・J III土壇、H II陥し穴状遺構	34
写真図版 4	1・2・3・4号溝跡	35
写真図版 5	掘立柱建物跡	36
写真図版 6	遺構外出土遺物（縄文土器、円盤状土製品）	37
写真図版 7	遺構外出土遺物（石器）	38
写真図版 8	遺構外出土遺物（石器）	39



第1図 岩手県における遺跡の位置





第2図 遺跡の位置と周辺の地形

## I. 中曽根遺跡の調査に至る経過

中曽根遺跡は岩手県職員住宅建設に関連して発掘調査された。中曽根遺跡については周知の遺跡であり、昭和52年度には市道建設に際し、昭和53～55年度には国道4号二戸バイパス建設に際し発掘調査され、奈良・平安時代の竪穴住居跡を主体とする縄文早期からの遺構が検出され、県北地方における大集落跡であることが明らかになった。

この事業に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、事業主体である岩手県総務部施設管理課と県教育委員会との間で協議がなされた。その結果、平成3年7月11日から12日にかけて県教育委員会によって試掘調査が実施され、6本のトレンチによって西半部には旧地形である沢が検出され、東半部からは陥し穴状遺構と竪穴住居跡の一部と推察される落ち込みが検出された。このため試掘範囲の東半部分については、県教育委員会の平成4年2月12日付け「教文第910号」により、発掘調査を平成4年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とした。これを受けて、当埋蔵文化財センターは平成4年4月1日付けの委託契約にもとづいて調査に着手することとなった。

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置 (第1、第2図)

中曽根遺跡は、岩手県二戸市石切所字中曽根地内にあつて、東日本旅客鉄道東北本線福岡駅の北約2.5km、二戸市の中心部岩谷橋の対岸約1km程の地点に位置している。

西に標高約300m程の急峻な朝日山の山塊を背負い、馬淵川を挟んで東方に二戸市の中町の市街地、九戸城跡、さらに標高852mの折爪岳の雄大な山稜を眺望できる地理的に大変恵まれた場所である。

### 2. 遺跡周辺の地形 (第2、第3図)

中曽根遺跡は、白鳥川の河口対岸、馬淵川の曲流部に舌状に張り出した沖積段丘東縁に立地している。

馬淵川は、岩手郡葛巻町東縁の袖山南面に源を発し、流路総面積2050m<sup>2</sup>、流路延長142km(うち岩手県域48.1km)をほこる県北内陸部最大の河川である。葛巻町を北北西に流れ下った馬淵川は、二戸郡一戸町の北端鳥越峡谷、二戸市の馬仙峡、金田一の北側下山井、青森県三戸郡梅内にかけて急峻な山塊間を複雑に曲流、その間安比川、白鳥川、沢内川、十文字川等の小河川を流合しつつ、流路兩岸に小規模な段丘群を形成している。

特に、石切所付近から金田一の北側下山井までの直線距離にして8～9km程の区間、馬淵川は緩やかに曲流し、流路兩岸に最大巾1.5km程の高位や生成時期の異なった幾段かの段丘の存在が顕著に観察される。

本遺跡の立地する標高97～98m程の中曽根段丘は、馬淵川のこのような下刻・浸蝕作用によって形成された段丘群の一つで、平坦にして肥沃な土地に乏しい県北部にあつて馬淵川の中流域に形成されたこれらの段丘は、古来より人々の生活の舞台として重要な役割を果たしてきたものと考えられる。

### 3. 馬淵川流域の段丘群 (第4図)

前述したように、馬淵川は中流域の石切所付近から金田一の北側下山井までの区間、緩やかに曲流し、流路兩岸に高位及び構成層からみて明らかに生成時期の異なる幾段かの細長い段丘群を形成している。

#### <仁左平段丘>

仁左平段丘は、仁左平付近、二戸市の中央部東方の陣場、大沢倉付近に分布する標高140～220m程の丘陵性の段丘で、砂礫・砂・粘土を主な構成層とする。

#### <福岡段丘>

福岡段丘は、下山井・仲町秋葉から上平・米沢・上里・五日町付近・海上川、十文字川流域に分布。八戸浮石流凝灰岩に当たる火山灰流凝灰岩を主な構成層とし、シラス台地としての性格をもっている。

#### <中町段丘>

中町段丘は、二戸市の中心部の中町付近・上平より北方の馬淵川の西岸・二戸市中心部の五日町付近の馬淵川東岸に分布し、数mの砂礫層と南部浮石層を伴う黒色土層を構成層としている。

#### <長嶺段丘>

長嶺段丘は、二戸市立体育館・二戸市中央公民館をのせる小規模な段丘で、低位の中町段丘と4～6m程の段丘差をもっている。

#### <堀野段丘>

堀野段丘は、馬淵川東岸の矢沢付近から堀野・杉ノ沢、西岸の下米沢から石切所にかけて分布している。数m程の段丘礫層の上に南部浮石層を伴う黒色土層をのせている。段丘縁と馬淵川との比高は14～18m程である。

#### <中曽根段丘>

中曽根段丘は、白鳥川の河口対岸の馬淵川曲流部に分布し、後背の堀野段丘とは2～3m程の高低差である。砂礫層と南部中振浮石層を含む黒色土層を主な構成層としている。

### 4. 周辺の遺跡（第5図）

地図中1～19の遺跡名は次のとおりである。

- |           |         |          |          |
|-----------|---------|----------|----------|
| 1 上田面遺跡   | 2 長瀬D遺跡 | 3 長瀬C遺跡  | 4 長瀬B遺跡  |
| 5 長瀬A遺跡   | 6 家の上遺跡 | 7 荒谷B遺跡  | 8 荒谷遺跡   |
| 9 下村遺跡    | 10 上村遺跡 | 11 火行塚遺跡 | 12 上里遺跡  |
| 13 大淵遺跡   | 14 堀野遺跡 | 15 館遺跡   | 16 沢田B遺跡 |
| 17 佐々木館遺跡 | 18 沢田遺跡 | 19 中曽根遺跡 |          |

#### <上田面遺跡>

土師器を伴う竪穴住居跡33棟、土坑7、時期不明の掘立柱建物跡2棟、円形溝1条を検出。昭和53年・54年埋蔵文化財センターが発掘調査。

#### <長瀬D遺跡>

縄文時代の竪穴住居跡1棟、ロクロ以前の古代の竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、火葬墓1基、周溝遺構1基、陥し穴状遺構1基、焼土土坑1基、土坑2基が検出されている。昭和

52年埋蔵文化財センターが発掘調査。

〈長瀬C遺跡〉

中世の竪穴住居跡7棟、奈良時代の竪穴住居跡24棟、縄文時代の土坑4基、周溝2、土坑8基、墓壇21基を検出している。昭和52年埋蔵文化財センターが発掘調査。

〈長瀬B遺跡〉

縄文時代の竪穴住居跡5棟、土坑7基、陥し穴状遺構7基、埋設土器1基、土師器を伴う竪穴住居跡4棟、炉跡2、周溝2基、近世の土坑14基が検出されている。

〈大淵遺跡〉

縄文時代の竪穴住居跡3棟、弥生時代の竪穴住居跡1棟、縄文時代晩期の石囲炉1基、近世の掘立柱建物跡3棟、方形周溝1基、弥生時代の埋設土器2基が検出されている。昭和54年埋蔵文化財センターが発掘調査。

〈火行塚遺跡〉

竪穴住居跡1棟、周溝6基、土坑2基、溝1条が検出されている。昭和54年埋蔵文化財センターが発掘調査。

〈沢田B遺跡〉

竪穴住居跡6棟、溝2条、柵列状遺構、焼土遺構8が検出されている。昭和53年埋蔵文化財センターが発掘調査。

〈上里遺跡〉

縄文時代前期末から中期の竪穴住居跡10棟、フラスコ状ピット78基、溝等が検出されている。

〈長瀬A遺跡〉

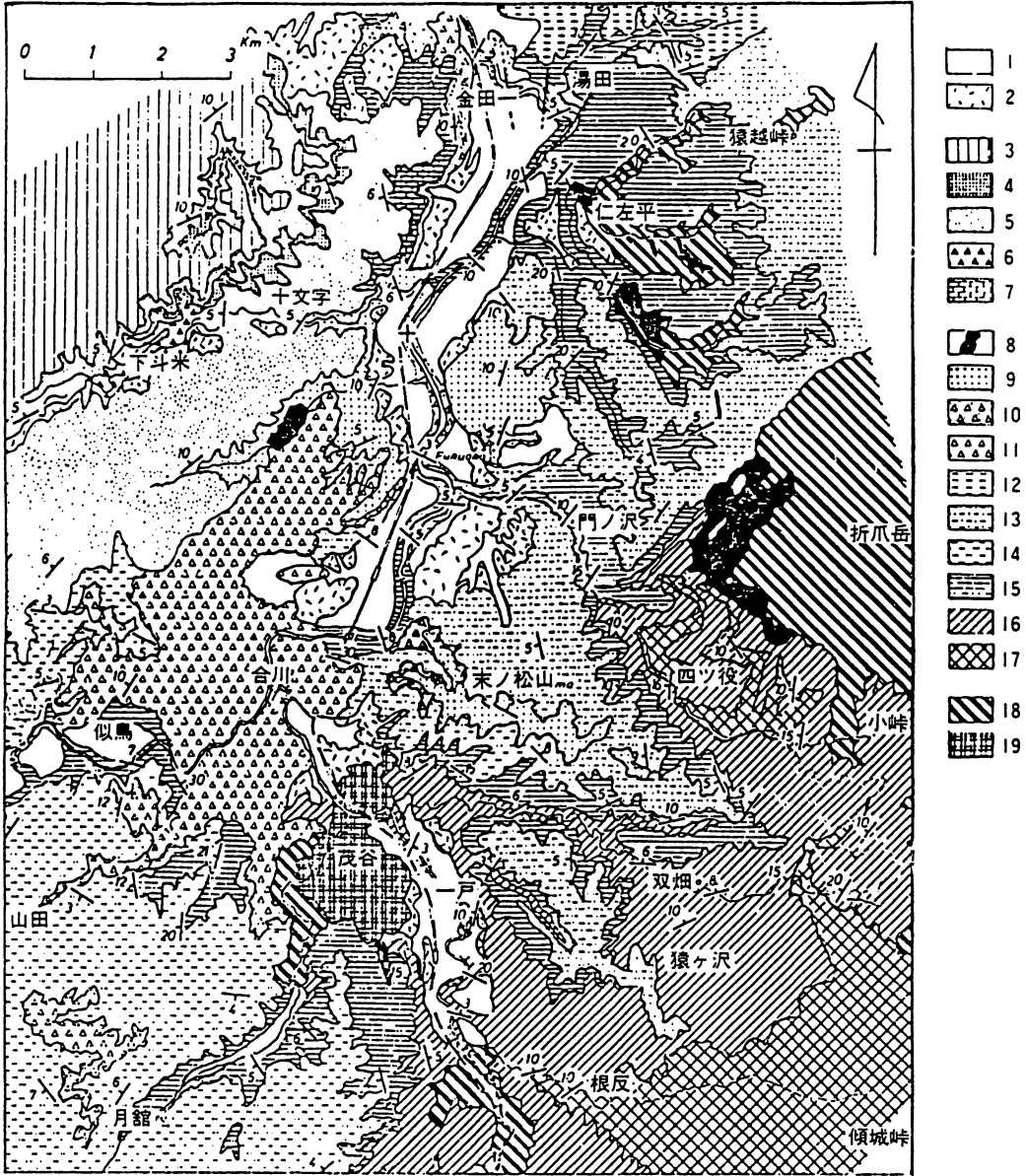
縄文時代の竪穴住居跡17棟、ピット1基、陥し穴状遺構4基、埋設土器1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡16棟が検出されている。

〈掘野遺跡〉

昭和38・39年岩手大学草間俊一教授が発掘調査し、竪穴住居跡、配石遺構等が検出されている。

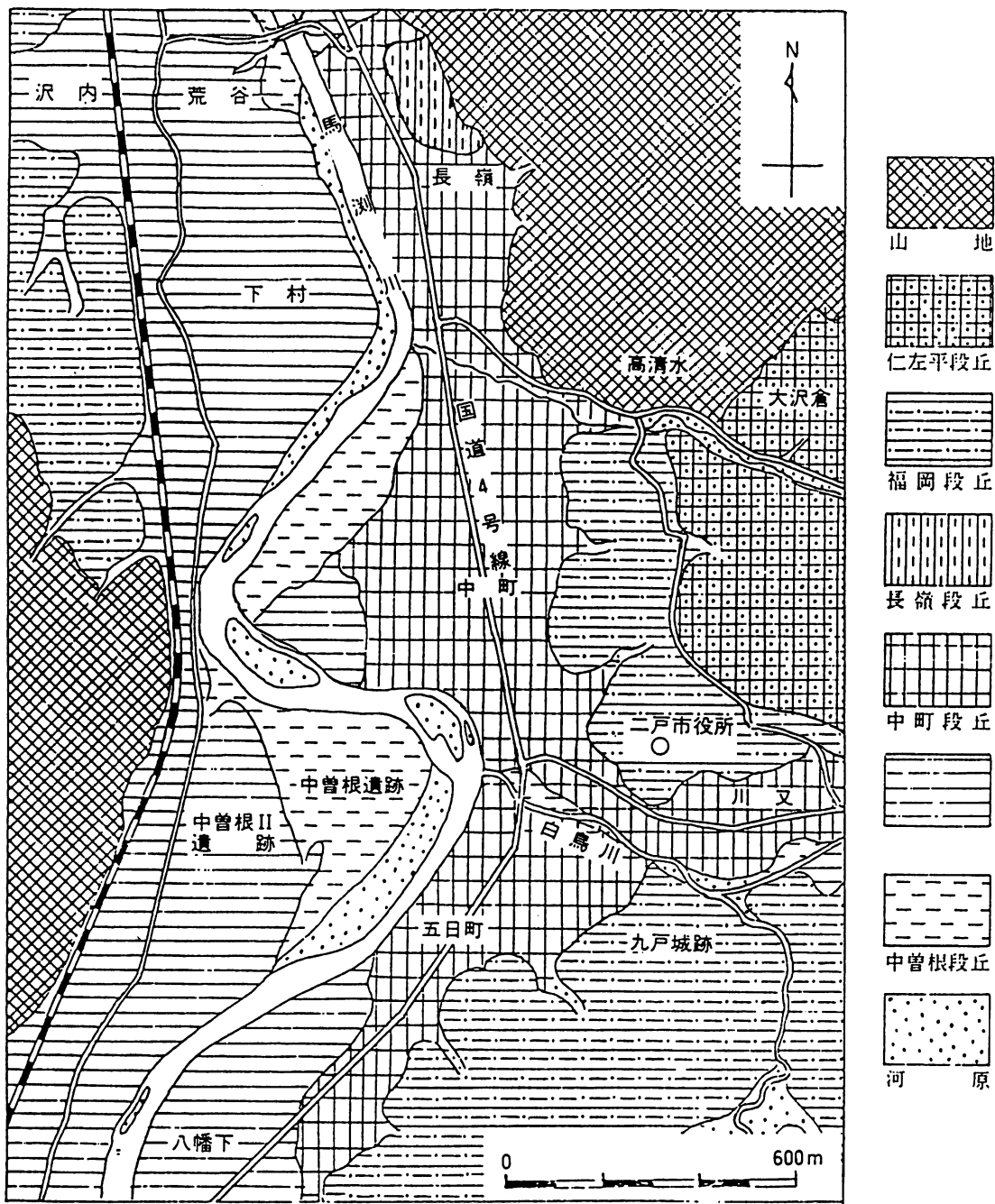
上記の遺跡の他に、二戸市内には次のような包含地、集落跡等が数多く点在している。

小端遺跡	上斗米・縄文時代晩期の包含層
子子子沢遺跡	上斗米・縄文時代晩期の包含層
蝦夷森遺跡	上斗米久保・土師器を伴う集落跡
外中沢遺跡	足沢・不明

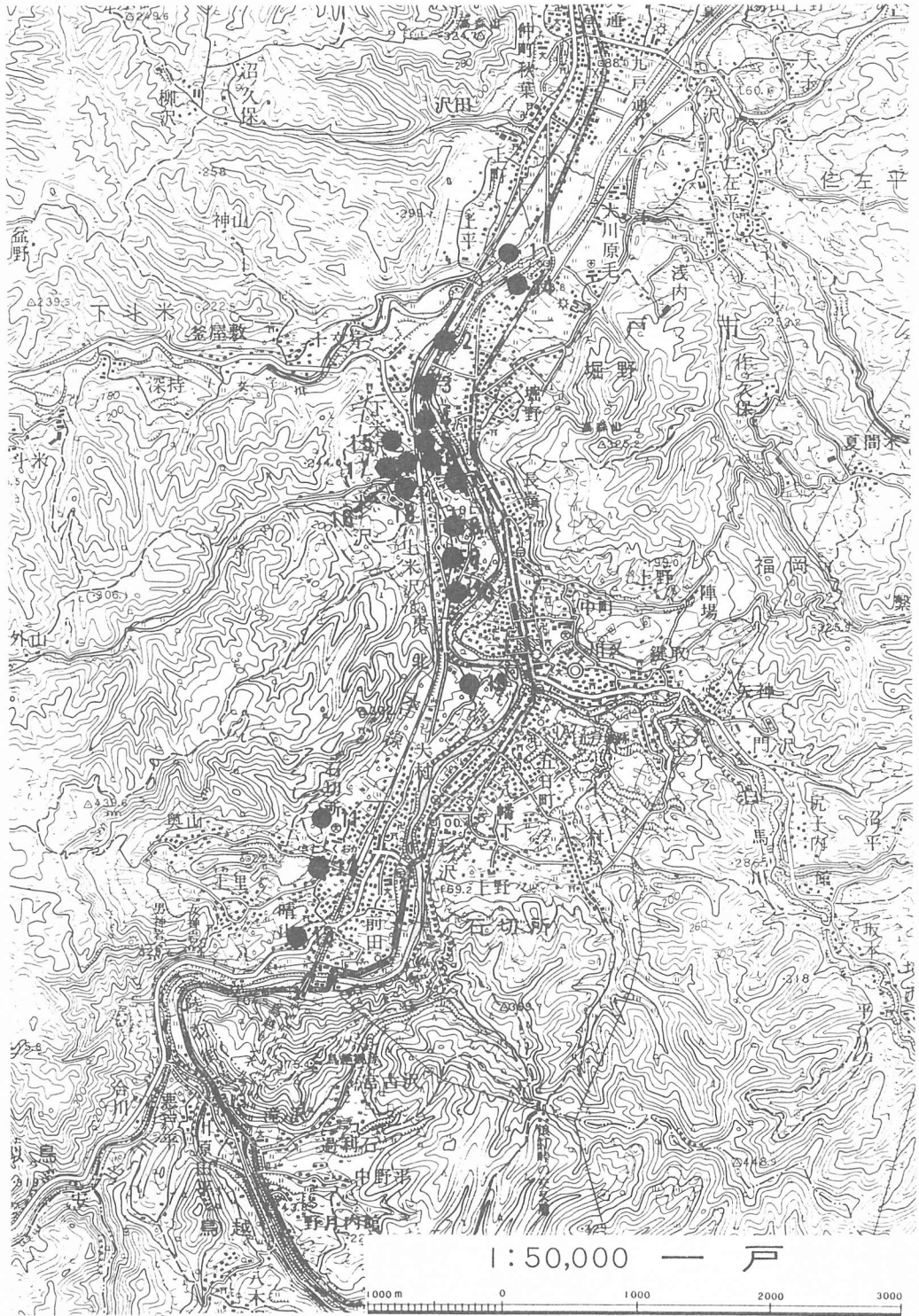


- 1. 沖積世堆積物
- 2. 浮石流堆積物
- 3. 舌崎層
- 4. 下斗米珪藻土岩
- 5. 十字砂岩
- 6. 下斗米砕岩
- 7. 目時貝殻石灰岩
- 8. 仁左平石英安山岩
- 9. 米沢砂岩
- 10. 名久井岳安山岩
- 11. 合川安山岩
- 12. 新田砂岩
- 13. 五日町砂岩
- 14. 月館砂岩
- 15. 門ノ沢層
- 16. 双畑互層
- 17. 傾城峠安山岩
- 18. 先第三紀堆積岩及び接触變成岩
- 19. 先第三紀火成岩

第3図 馬淵川流域の地質図(鎮西清高・1996による)



第4図 遺跡周辺の段丘区分図(二中市教育委員会  
中曾根II遺跡より)



第5図 周辺の遺跡



米沢遺跡	上斗米・縄文晩期及び土師器の集落跡
根森遺跡	上斗米・縄文時代の集落跡
夏間木遺跡	縄文時代の後期及び晩期の集落跡
戸花遺跡	仁左平・縄文晩期の集落跡
橋場遺跡	縄文時代晩期の集落跡
牛間木A遺跡	上斗米・縄文時代晩期の集落跡
野月平遺跡	上斗・土師器の集落跡
本田遺跡	上斗米・縄文時代晩期の奉還層
牛間木B遺跡	上斗米・縄文時代晩期の集落跡

## 5. 基本層序 (第6図)

中曾遺跡の段丘基盤は凝灰岩質砂岩で、この上に段丘堆積物がのっている。以下その層序は上位から述べると次のような構成になっている。

I層 7.5Y R 3/2 黒褐色を呈し、シルト質の腐食土層。粒度的には均質で軟らかく、草木根の混入が顕著に観察される。

No.1 地点で層厚80～90cm程で、均質で軟らかく、上部ほど草木根の混入が顕著。

No.2 地点で層厚60cm程で、比較的軟質。

No.3 地点で層厚50cm程で、草木根の混入顕著。

No.4 地点で層厚50cm、下部はやや砂質。

No.5 地点で層厚60～70cm、下部はやや砂質。

No.6 地点で層厚90～100cm、下部ほど砂質であるが均質。

No.7 地点で層厚80～900cm、粒度的には均質。

II層 7.5Y R 3/1 黒褐色を呈し、粒度的には均質でやや砂質。

No.1 地点で層厚は5～10cm、粒度的には均質でやや砂質。

No.2 地点で層厚60cm程、比較的均質でやや有機質砂を含む。

No.3 地点で層厚3～5cm、流亡のためか薄くやや有機質砂を含む。

No.4 地点で層厚数cm、下部ほど砂質。

No.5 地点で層厚40cm程、下部ほど有機質砂。

No.6 地点で層厚10～20cm、やや砂質であるが粒度的には均質。

No.7 地点で層厚320cm程で、やや有機質砂。

III層 10Y R 2/3～2/2 黒褐色を呈し、有機質砂。

No.1 地点で層厚50cm、砂分は微砂・中砂を多く含む。

No. 2 地点で層厚40～50cm、砂分は微砂で45～50%位。

No. 3 地点で層厚50～60cm、砂分は45～55%位でやや均質。

No. 4 地点で層厚45cm、砂分は35%位でやや有機質。

No. 5 地点で層厚30cm、砂分は微砂～細砂で60%位。

No. 6 地点で層厚40cm、砂分は細砂で65～70%位。粒度的にはやや均質。

No. 7 地点で層厚30～40cm、砂分は70～80%位。

IV層 10 Y R 3 / 4 暗褐色を基調とし、下部に向かって茶褐色・茶灰色へと変化する砂質シルト。

No. 1 地点で層厚70cm、やや粘土質シルト。

No. 2 地点で層厚135cm、砂分は微砂で45～55%位。2 m付近から含水多く、2.6mほどから30m/mの円礫を含む。

No. 3 地点で層厚160cm、砂分は45～55%ほどでやや不均質。1.5m付近に15～20m/mの礫が混入。1.8～1.9m付近では粘土質を挟む。

No. 4 地点で層厚170cm、やや不均質で砂分は45～55%位。1.6m付近より10～20m/mほどの円礫が混入。

No. 5 地点で層厚150cm、比較的均質で砂分は微砂・細砂で45～55%位。2 m付近より砂分優勢。

No. 6 地点で層厚95cm、1.25～2.25m付近は粘土質・シルト質。下部ほどシルト質。

No. 7 地点で層厚105cm、局部的に粘土質・シルト質。

V層 茶褐色～暗茶褐色を呈し、砂礫層。

No. 1 地点で層厚20cm、30～40m/mの砂礫含む。

No. 2 地点で層厚40～60cm、下部の砂礫分は30m/mの礫で60～85%位。砂質は微砂・細砂。

No. 3 地点で層厚63cm、5～30m/mほどの礫を主体としている。礫分は80～85%位。

No. 4 地点で層厚350cm、礫分は60～85%ほどで砂質は微砂・細砂。

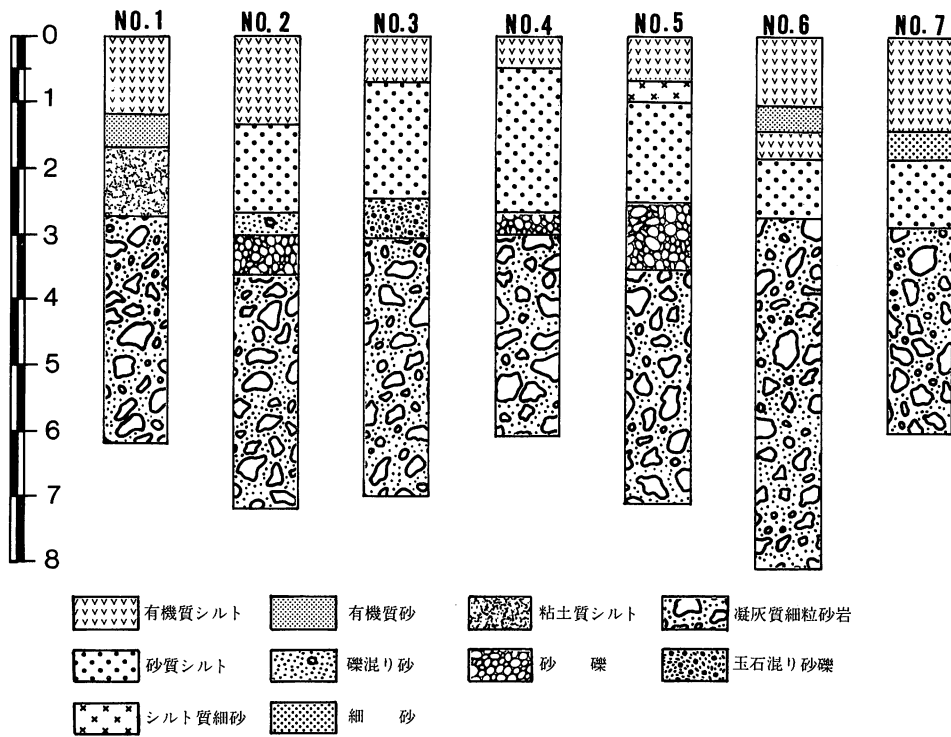
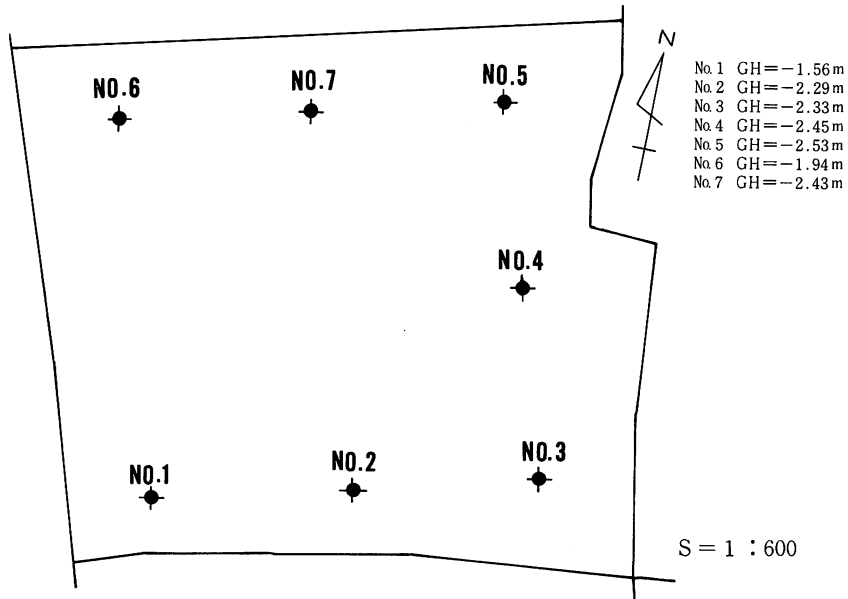
No. 5 地点で層厚100cm、5～30m/m程の砂礫の混入顕著。

No. 6・No. 7 地点では流亡のためか明確なかたちで確認されない。

VI層 7.5 Y R 黄褐色 3 / 4 ～ 4 / 4 を基調として下部に向かうにしたがって暗黄褐色及び暗灰色へと変化する。凝灰質細粒砂岩。

No. 1 地点で層厚343cm、2.75～3.00m付近では風化のためか黄褐色を呈する。3.00～5.45 m付近では風化のため暗黄褐色を呈する。砂分は微砂で均質。下部は棒状コアで採取される軟岩。

No. 2 地点では層厚3.6m、4 m付近では暗黄褐色、5 m付近では暗灰色を呈し、露結状で棒状コアで採取される軟岩。



第 6 図 中曾根遺跡の主要地点柱状図

No.3 地点では層厚 4 m、3.12～3.28m・3.88～4.33m付近では露風化のためか暗黄褐色を呈する。砂質は微砂・細砂で棒状コアで採取される軟岩。

No.4 地点で層厚3.08m、砂分は均質で微砂。露結状を呈し、棒状コアで採取される軟岩。

No.5 地点で層厚3.62m、3.72m付近で露風化のため暗黄褐色に変色し、露結状を呈する軟岩。

No.6 地点で層厚5.33m、3 m前後で暗黄褐色を呈する。固結状で砂質は細砂。

No.7 地点では層厚3.18m、2.95～3.00m付近では風化のためか暗黄褐色を呈する。固結状で棒状コアで採取される軟岩。

### III. 調査の方法と整理

#### 1. グリッド設定

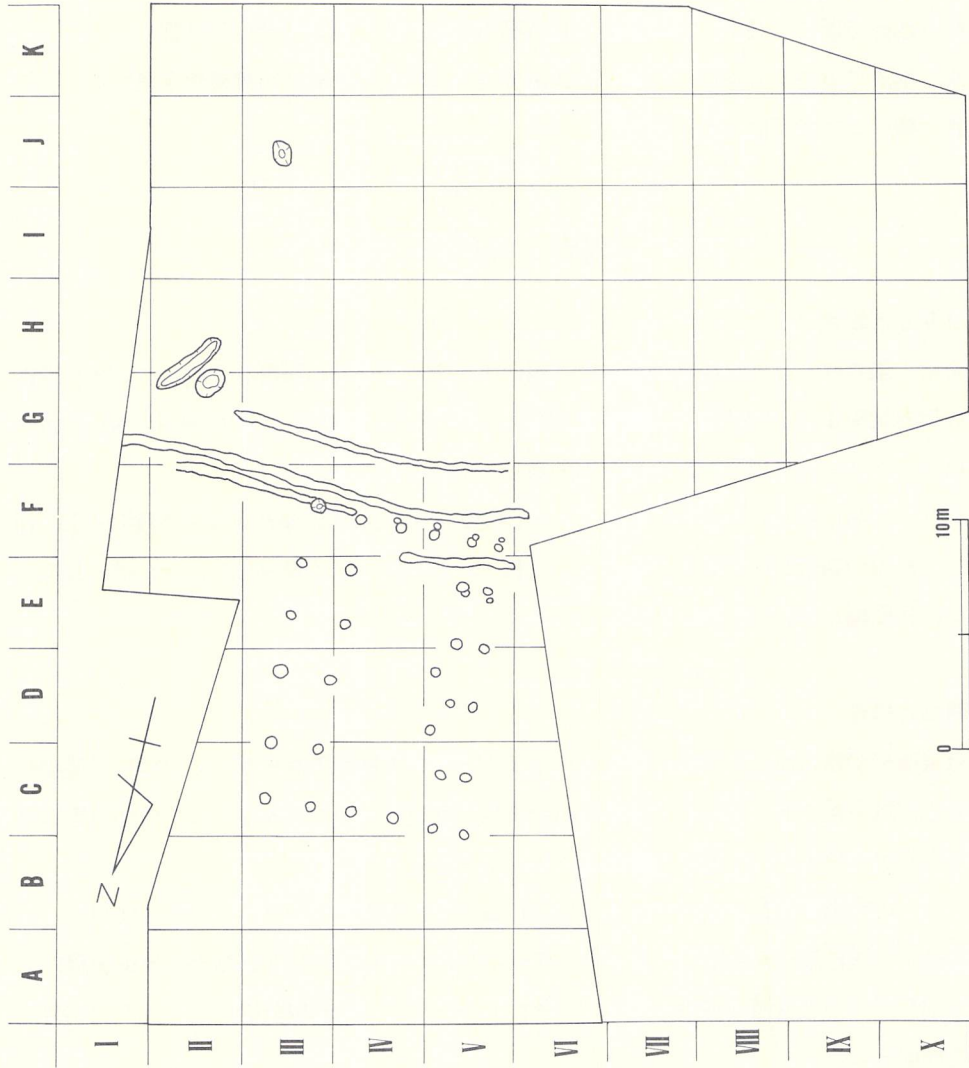
2ヶ月余の限られた調査日程と調査区域に包含する全ての遺構の検出を念頭において、遺跡の東端の境界杭No.1、No.2を用いた作業用基準ラインを基に8m毎の大区画を設定、さらに各々4×4mの小グリッドに細分し、これを本調査の基本単位とした。

またグリッド名は南北に北からアルファベット順にA～K、東西に東からローマ数字でI～VIIを付し、これらの組み合わせ（A Iグリッド、A IIグリット……）で表示した。なお磁北は座北に対して約10度偏している。

#### 2. 粗掘と精査

粗掘は遺構や遺物の発見を目的として人手によるトレンチ掘を行なった。その結果、遺構や遺物の発見区域が相当あったことや工事用の砂礫混じりの客土のため人手による作業が困難なところもあり表土除去と土捨場確保のためバックホーを用いた。

バックホーの可動に際してはバケットの爪に15mmほどの更鋼板を溶接したものを使用し、常時、調査員が重機付近に立ち会ってオペレーターに細かい指示を与えた、結果、重機使用による遺構の掘り過ぎや小遺構の破壊等は防止できたものと思う。遺構の精査については、2分割・4分割を原則とした。



第7図 中曾根遺跡遺構配置図

### 3. 遺構の命名と実測

遺構の命名は4×4mのグリッドを基本単位とし、種別に連番を付した。実測については、遺物の取り上げ、遺構実測図（遺構の土層断面図、平面図）は原則として20分の1で作成し、方法は全て遺り方測量で行なった。

### 4. 野外における写真撮影

調査現場における遺構平面・土層断面・全体的な写真は35mm版モノクロ、カラーリバーサルの2種類を用いて使用した。なお撮影に際しては遺構名・方位・年月日・天候等を記した撮影カードを有効活用し、室内整理段階での混乱防止を試みた。

### 5. 室内整理

室内整理は通常の手順によって行い、略報及び本報告書の作成にあたった。報告書の記述のうち、遺構は本文、図番、写真図版ともに種類別に掲載した。異物は遺構内外に関係なく掲載順に1からの通し番号を付した。

遺構の縮尺は原則として40分の1、一部80分の1とした。図版は原寸、3分の2、2分の1、一部任意の縮尺である。

## IV. 遺構と遺物

### 1. 遺構（第7図）

調査の結果、土坑2基、陥し穴状遺構1基、溝4条、掘立柱建物跡1棟が検出された。

#### （1）土坑

##### G II土坑1号（第8図面・写真図版3）

〈位置・検出状況〉調査区のほぼ中央東端G IIグリッドのやや南寄りに位置し、II層中位でほぼ平面図がおよそ確認された。

〈規模〉128×92cm、深さ34cmの規模を有する。

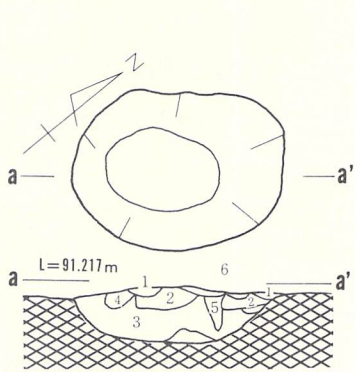
〈平面形・断面形〉不整ながら楕円形状で、断面形はカマボコ状を呈する。

〈埋土〉埋土は下記のように6層により構成されている。

〈出土遺物〉伴出遺物はない。

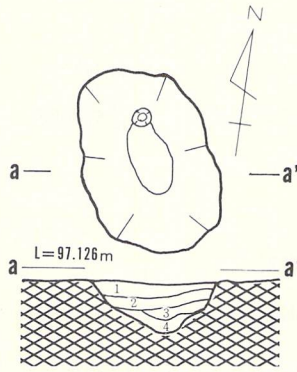
##### J III土坑1号（第7図・写真図版3）

〈位置・検出状況〉調査区の南端J IIIグリッドのやや北寄りに位置している。II層中位ほど



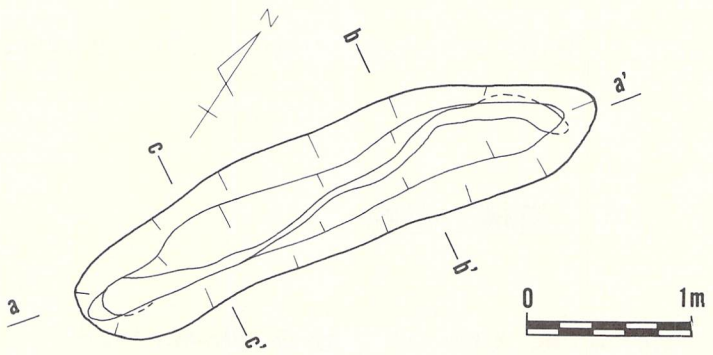
G II 土坑 1 号

- 1 5YR2/2 黒褐色を呈し、粘性なくさらさらしている。
- 2 10YR2/3 黒褐色を呈し、細砂を多く含みさらさらしている。
- 3 7.5YR2/2 黒褐色を呈し、若干砂を含みやや粘性有り。
- 4 10YR1/3 褐色を呈し、粒度的には均質。
- 5 10YR1/3 暗褐色を呈し、粒度的に均一でやや粘土質。
- 6 5YR7/1 黒色を呈し、若干粘性有り。

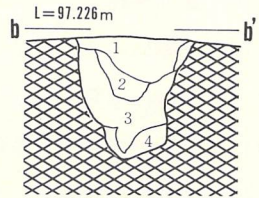
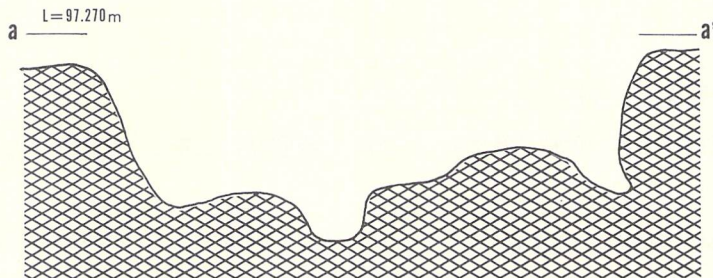


J III 土坑 1 号

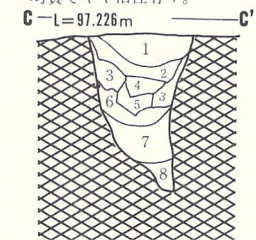
- 1 5YR1.7/1 黒色を呈し、さらさらしている。
- 2 10YR 2/3 黒褐色を呈し、粘性はなく粒度的に均質で軟かい。
- 3 10YR 2/3 黒褐色を呈し、微砂・細砂を多く含みやや粘土質。
- 4 10YR 3/3 暗褐色を呈し、細砂を若干含んでいる。



H II 陥し穴状遺構



- 1 5YR1.7/1 黒色を呈し、やや粘性有り。
- 2 2.5YR1.7/1 赤褐色を呈し、やや粘土質。
- 3 7.5YR 2/2 黒褐色を呈し、やや粘土質で微砂の混入が観察される。
- 4 10YR 2/3 黒褐色を呈し、粒度的には均質でやや粘性有り。



- 1 5YR1.7/1 黒褐色を呈し、やや粘性有り。
- 2 2.5YR1.7/1 赤褐色を呈し、やや粘土質。
- 3 7.5YR 2/2 黒褐色を呈し、やや粘土質で微砂の混入が観察される。
- 4 10YR 2/3 黒褐色を呈し、粒度的には均質でやや粘性有り。
- 5 10YR 2/1 黒色を呈し、微砂・細砂の混入が若干認められる。
- 6 10YR 2/2 黒褐色を呈し、細砂の混入が顕著に観察される。やや粘土質。
- 7 7.5YR 2/3 極暗褐色を呈し、細砂の混入が認められやや湿性有り。

第 8 図 G II 土坑・J III 土坑・H II 陥し穴状遺構

でおよそ平面形が確認された。

〈規模〉132×53cm、深さ34cmの規模を有する。

〈平面形・断面形〉G II土坑1号同様不整の楕円形で、断面形はカマボコ状を呈する。

〈埋土〉埋土は下記のように4層より構成されている。

〈出土遺物〉伴出遺物はない。

## (2) 陥し穴状遺構

H II陥し穴状遺構1号(第7図・写真図版3)

〈位置・検出状況〉G IIグリッドからH IIグリッドにかけて位置している。

〈平面形・断面形〉不整形ながら長楕円形で、断面はV字状を呈している。

〈埋土〉埋土の状況は8層から構成されている。

〈出土遺物〉伴出遺物はない。

## (3) 溝跡

1号溝跡(第9図・写真図版4)

〈位置・検出状況〉G II・G III・G IV・F IVグリッドにかけて位置し、II層上面でおよその外形が確認できた。

〈規模〉全長12.4m、最大巾0.44m、深さ0.48mの規模を有する。

〈断面形〉断面形はU字状を呈する。

〈埋土〉埋土は5層より構成されている。

〈出土遺物〉時期を特定する遺物は出土していない。

2号溝跡(第9図・写真図版4)

〈位置・検出状況〉G II・G III・F III・F IV・F Vにかけて位置し、本遺跡中最大の規模を有する。

〈規模〉全長18.2m、最大巾0.38m、深さ0.43mを測る。

〈断面形〉断面は1号溝同様U字状を呈する。

〈埋土〉埋土は4層より構成されている。

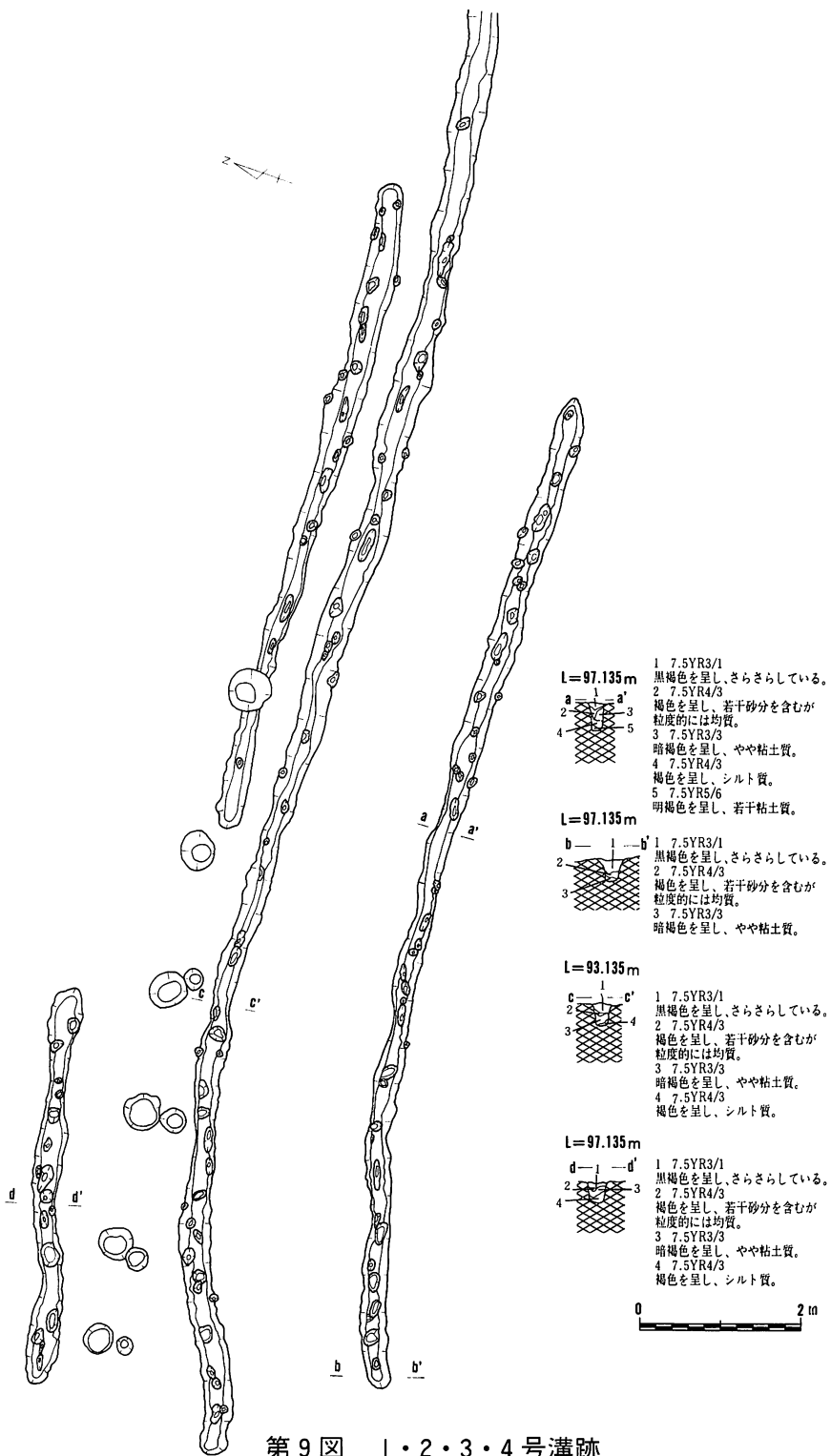
〈出土遺物〉伴出遺物がなく、時代が特定できない。

3号溝跡(第9図・写真図版4)

〈位置・検出状況〉F II・F III・F IVグリッドにかけて位置し、II層上面から中位で外形が確認できた。

〈規模〉全長8.2m、最大巾0.43m、深さ0.34mの規模を有する。





第9図 1・2・3・4号溝跡

〈断面形〉1・2号同様U字状を呈する。

〈埋土〉4層より構成されている。

〈出土遺物〉時代を特定する遺物は出土していない。

#### 4号溝跡（第9図・写真図版4）

〈位置・検出状況〉E IIIグリッド・F IVグリッドにかけて位置し、II層上面から中位で外形が確認できた。

〈規模〉全長4.9m、最大巾0.45m、深さ0.30mで本遺跡中最小の規模である。

〈断面形〉1・2・3号同様U字状を呈する。

〈埋土〉4層より構成されている。

〈出土遺物〉時代を特定する遺物は出土していない。

### （4）掘立柱建物跡

#### 掘立柱建物跡1号（第10図・写真図版5）

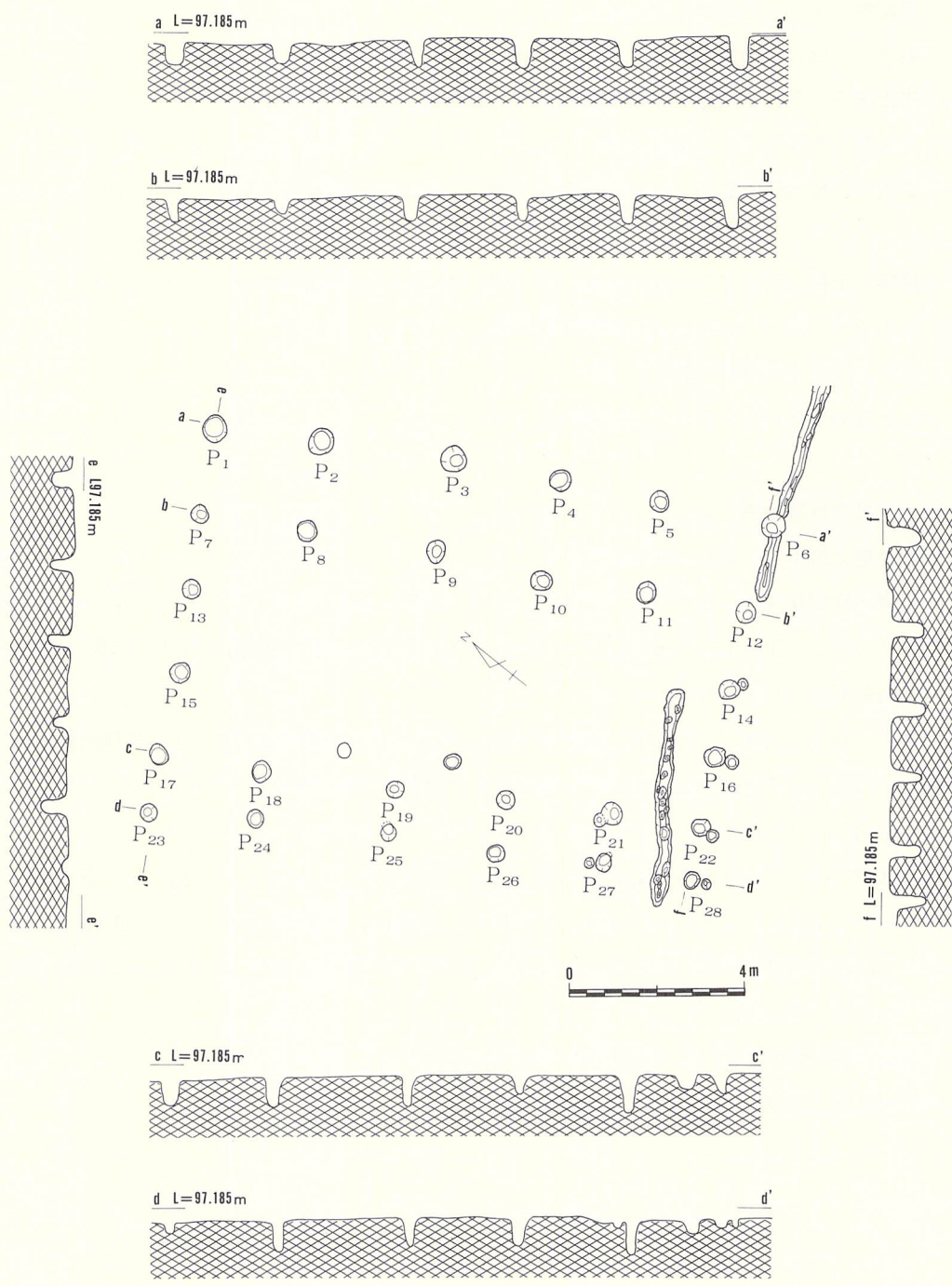
〈位置・検出状況〉C III・C IV・C Vグリッド、D III・D IV・D Vグリッド、E III・E IV・E Vグリッド、F III・F IV・F Vグリッドにかけて位置している、溝跡同様II層上面から中位で柱穴の外形が確認された。

〈規模〉身舎の規模は東西3間、南北5間で、東西両面に庇が付属する南北棟の建物跡で、東西柱穴列は北側で5.56m±、南側で5.69m±、南北柱穴列は西側が12.79m±、東側で12.67m±0を測る。

桁行は西側柱穴列が北から2.41m±、3.04m±、2.58m±、2.58m±、2.18m±、東側で2.44m±、2.98m±、2.57m±、2.59m±、2.10m±を測る。梁行は北側が西から1.93m±、2.15m±、1.48m±で南側が1.95m±、2.20m±、1.51m±を測る。掘り方の規模は40～50cm±、深さ68～80cm±を測る。

〈埋土〉明褐色土の混じる暗褐色土で全体的にボソボソしている。

〈時期〉出土遺物がなく、時期を特定できない。



第10図 掘立柱建物跡

## 2. 遺物

本調査によって検出された遺物は縄文土器片21点、土製品1点、石器15点とごく僅かで、全て遺構外からの出土である。

### (1) 土器 (第11図・写真図版6図)

本遺跡出土の縄文土器は、そのほとんどが調査区のほぼ中央E・F・GグリッドI層中遺構外からの検出であり、中に摩滅が激しく小細片のために拓本が不可能なものも含まれている。

#### I類土器 (第11図1～4・7、写真図版6-1～4・7)

細片と摩滅のため全体的な文様構成や器種は把握できないが、緩やかな沈線と磨消縄文による文様区画帯を有する一群である。1・3は沈線が浅く摩滅しているが、全体として焼成は不良で脆い。

#### II類土器 (第11図5・6、写真図版5・6)

平行沈線と磨消縄文の技法によって見事な帯縄文の文様を展開する一群である。5は形状からみて6同様口縁上部破片で、やや直口気味を呈するものと考えられる。

焼成は良好で堅緻な作りである。

#### III類土器 (第11図8～16、写真図版8～16)

地文(単節の斜縄文)のみ一群で、8・9・10を除くと小細片で摩滅が激しく焼成も不良で脆い。11は形状からみて粗製深鉢形土器の胴下部破片と推定される。

#### IV類土器 (第11図17・18、写真図版17・18)

GIII・JIIIグリッドI層中からの2点の出土で、焼成は比較的良好で堅緻な作りの無文土器群である。細片のため全体的な器形等は不明である。

### (2) 土製品 (第11図19、写真図版19)

HVグリッドI層中より円盤状土製品(土製円盤)が1点出土している。縄文土器片を人為的に打ち欠いて仕上げたもので、焼成も良好で堅緻な作りである。3.3×3.1cm、厚さ0.3cmを測る。

### (3) 石器 (第12、13、14図、写真図版7、8図)

本遺跡出土の石器は、縄文土器同様調査区のほぼ中央E・F・G・Hの各グリッドI層中遺構外からの検出であり、種類も剥片石器、磨製石斧、打製石斧、磨石、石皿と少ない。

#### 剥片石器 a類 (第12図1・2、写真図版7-1・2)

先端部位の両面に比較的小さい剥離加工が施され、全体として尖頭状を呈する。1は赤色凝

灰岩、2は細粒凝灰岩を石材としている。

**剥片石器b類**（第12図3・4・7第13図9、写真図版7-3・4・7、8-11）

比較的厚みで扁平な剥片の両面に細かい剥離加工を施して巾広の緩やかな蛤刃を作出している。刃部の形状などからおそらく削器的機能をもつものと考えられる。石質は3が細粒凝灰岩、4は凝灰岩質粘板岩、7は泥質凝灰質、9は粘板岩である。

**剥片石器c類**（第12図6、写真図版7-6）

扁平な円礫を半割した素材に粗雑な打ち欠きを施して円弧状の鈍い刃部を作出している。全体的に三日月を呈し、石質は粘板岩。

**剥片石器**（第13図8、写真図版7-8）

比較的薄手で板状の剥片の一端に両面から粗雑な剥離加工を施して抉り部が作出されている。石質は粘板岩。

**磨製石斧**（第13図11、写真図版8-10）

全体として厚手で両面が滑らかに研磨されている。基部には叩きの痕跡が観察され、刃部には刃こぼれと目される痕跡が顕著に認められる。石質は頁岩。

**打製石斧**（第13図10、写真図版8-9）

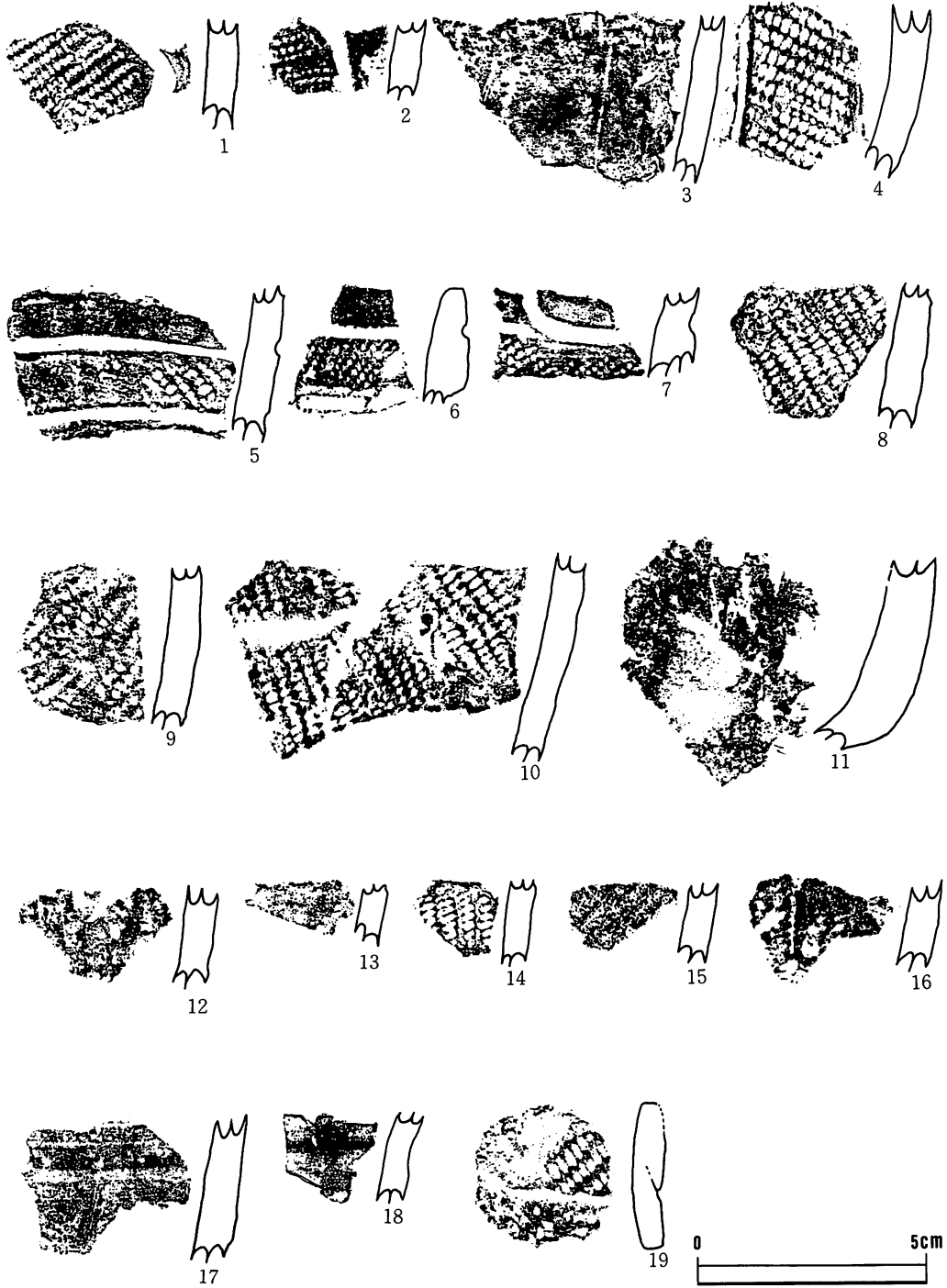
全体として棒状を呈し、先端両面が鈍く尖頭状に粗雑に打ち欠かれ刃部を作出している。石質は緑色凝灰岩。

**磨石**（第13図12・13、第14図14、写真図版8-12・13・14）

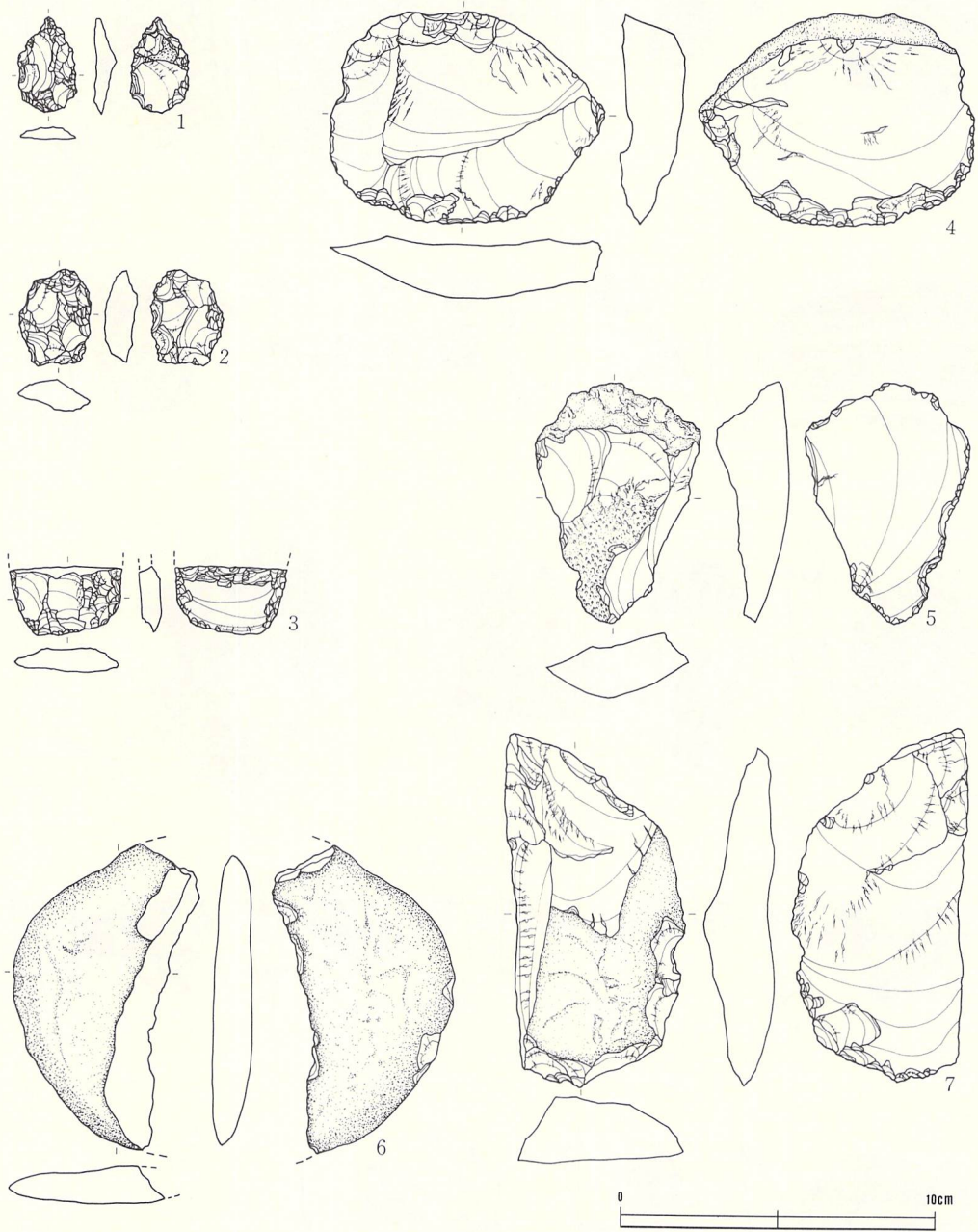
扁平な円礫の両面に比較的滑らかな研磨痕が観察される。12・13は両輝石安山岩、14は凝灰質硬砂岩。

**石皿**（第13図15、写真図版8-15）

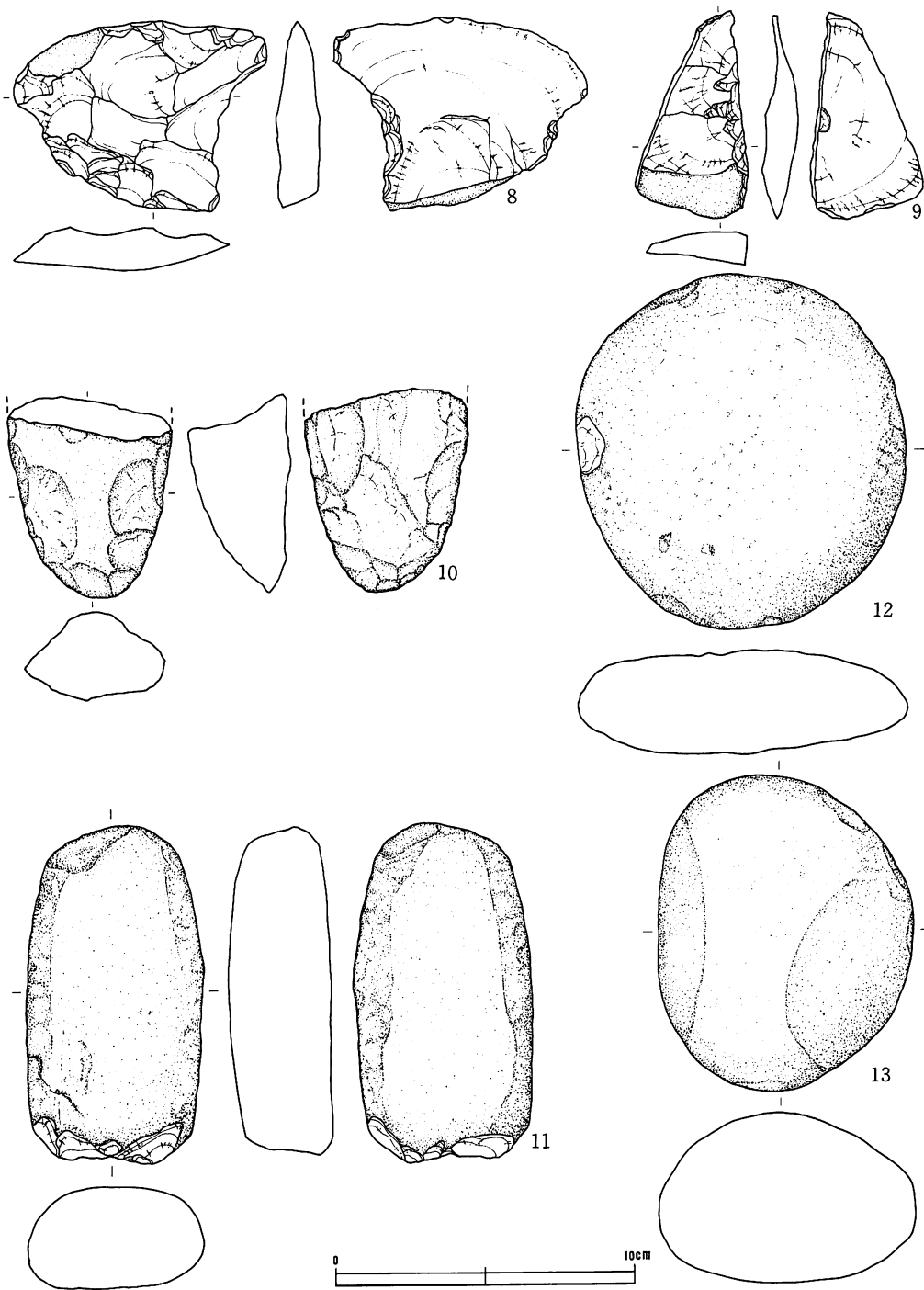
扁平な角礫を素材として表裏両面の中心に比較的滑らかな部位が観察される。石質は流紋岩。



第11図 遺構外出土遺物(繩文土器・円盤状土製品)

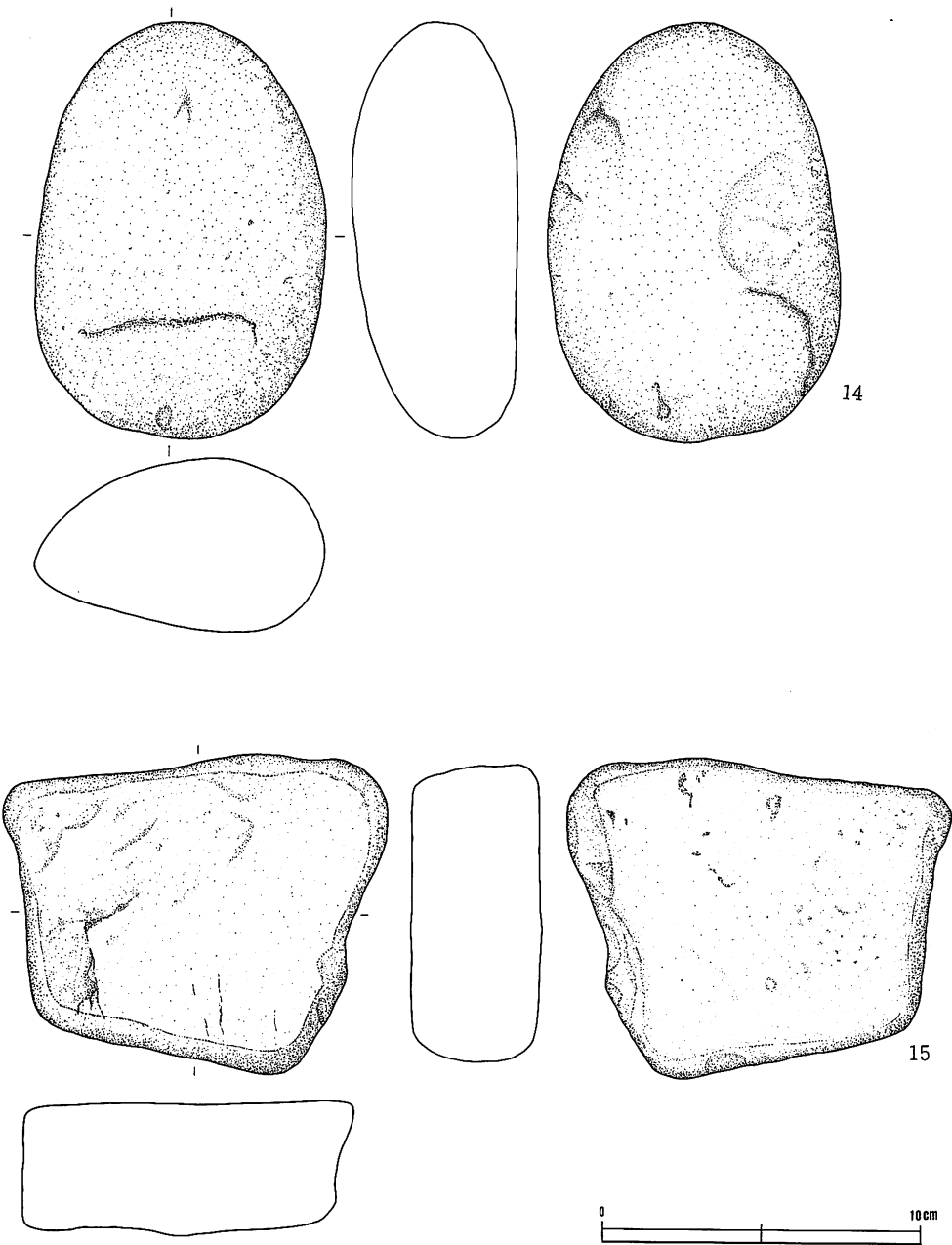


第12図 遺構外出土遺物(石器)



第13図 遺構外出土遺物(石器)





第14図 遺構外出土遺物(石器)

## V. ま と め

### 1. 遺構

前述のとおり本遺跡で検出された遺構は、土坑 2 基、陥し穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 1 棟、溝 4 条である。

#### (1) 土坑13

調査区のほぼ中央東縁G IIグリッド、J IIIグリッドでそれぞれ検出されているが、遺構の占地状況などからさらに東寄りの調査区域外にも存在するものと推定される。なお時期を特定する遺物等は検出されないが埋土の状況などから後述の陥し穴遺構と同様縄文時代のものと考えられる。

#### (2) 陥し穴状遺構

調査区の中央東縁H IIグリッドで検出され、平面形は長楕円形で断面形は切り立つようなV字状を呈している。砂礫層を切り込んで構築されているため底面は凹凸が激しく、底面の立ち上がり部位では拳大礫の露出が観察される。なお土坑同様伴出遺物がなく時代を特定できないが、埋土等から縄文時代のものと考えられる。

#### (3) 溝跡

調査区のほぼ中央部を東西に横断するかたちで 4 条の溝が検出され、最短は4.9mの 4 号溝、最長は18.2mの 2 号溝で、断面形はいずれもU字状を呈している。伴出遺物がなく時代は特定できないが、後述の掘立柱建物跡の柱穴により 3 号溝の一部が断ち切られているところから 3 号溝に関しては明らかに掘立柱建物跡よりも時期的に古いものと考えられる。

#### (4) 掘立柱建物跡

調査区はやや北よりC III～V・D III～V・E III～V・F III～Vにかけて柱穴列が検出され、東西 3 間、南北 5 間の規模で、東西両面に庇を有する南北棟の建物である。なお伴出遺物がなく時代を特定できないが、3 号溝の一部を柱穴列が断ち切っているところから明らかにこの溝よりも時期的に新しいものである。

## 2. 遺物

本遺跡で出土した遺物は縄文土器片21点、石器15点とごく僅かで、全て遺構外 I 層中からの出土である。

### (1) 土器

前述のとおり全て破片で全体的な文様帯構成、機種等は把握できないが I 類土器は緩やかな沈線と磨消による加飾技法などから縄文時代中期大木9.10式に比定される土器群と考えられる。II類土器は平行沈線と磨消による帯縄文の文様帯を有する土器群で、I類同様破片のみで全体的な器形等は把握できないが文様構成からみて縄文時代後期に比定されるものと考えられる。III類土器は地文（単節の斜縄文）のみで時期を特定する特徴的文様帯を有しないが、おそらく I・II類と同様の時期のものと考えられる。

### (2) 土製品

円盤状土製品（土製円盤・土製メンコとも呼ばれている）がHVグリッド I 層中 1 点出土している。大迫町立石遺跡や亀ヶ森小田遺跡出土のものと形状・大きさ等が類似している。伴出遺物がなく時代は特定できないが、他遺跡と同様縄文時代中期から後期に位置付けられるものと推測される。

### (3) 石器

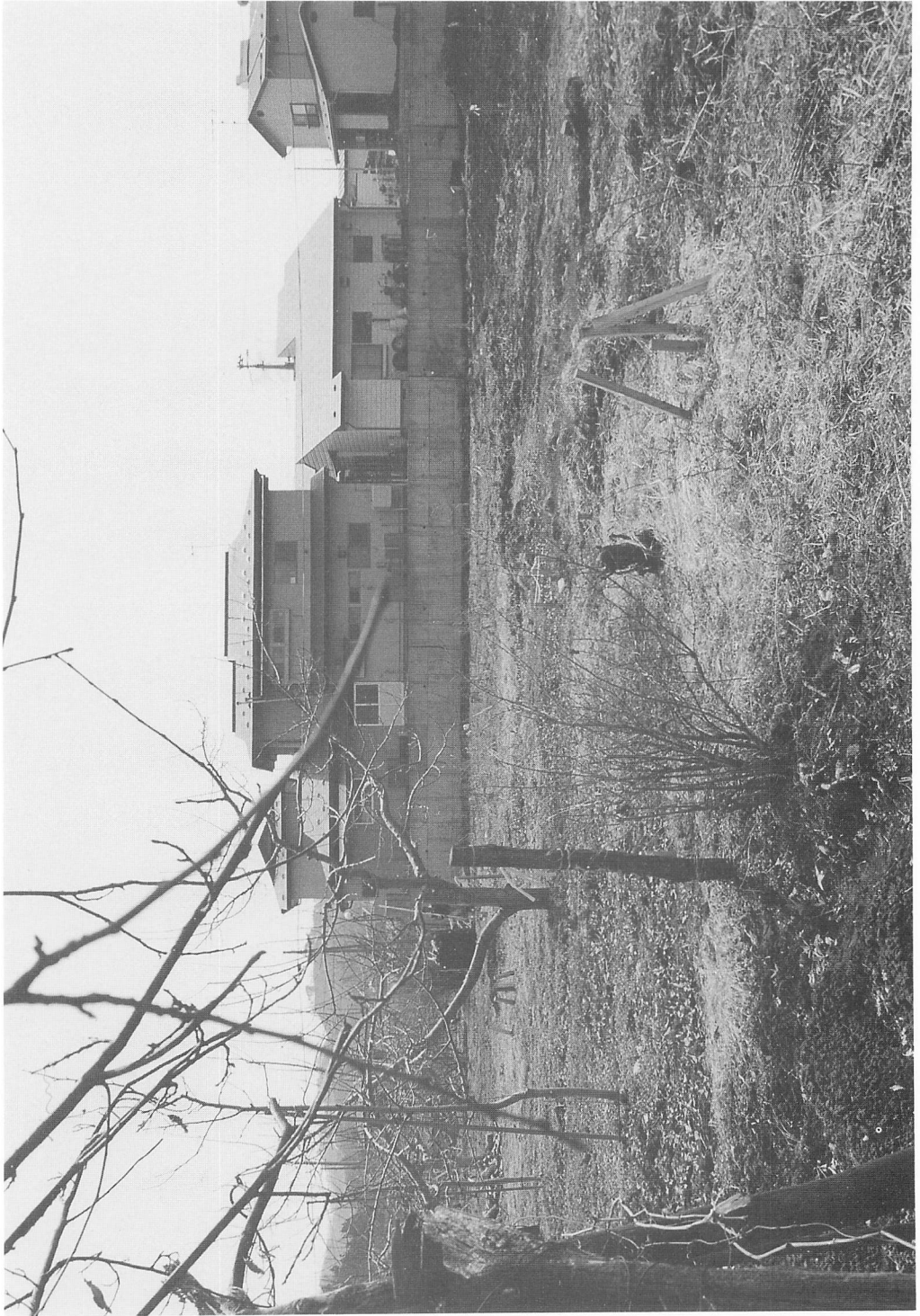
縄文土器同様全て遺構外 I 層中からのもので15点を数えるにすぎない。内訳は剥片石器 9 点、磨製石斧 1 点、打製石斧 1 点、磨石 3 点、石皿 1 点で、本遺跡では石材として剥片石器の場合凝灰岩が、礫石器の場合両輝石安山岩が多用されているようである。

以上のような遺構・遺物に関する若干の考察とまとめを統括すると、本遺跡は縄文時代に狩り場的なかたちで利用され、その後も不連続ながら人々の生活の舞台としての役割を果たしていたものと推測される。

## 引用・参考文献

- 興野義一 (1970) 「大木式土器について」清文堂
- 林 謙作 (1967) 「縄文文化の発展と地域性」「日本の考古学II」
- 中村良幸他 (1979) 「立石遺跡」大迫町教育委員会
- 関 豊他 (昭和56年) 「中曽根II遺跡発掘調査報告書」二戸市教育委員会
- 本沢慎輔他 (昭和52年) 「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 遠藤勝博他 (昭和56年) 「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 関 豊 (1978) 「中曽根遺跡発掘調査報告書」二戸市教育委員会
- 四井謙吉他 (昭和57年) 「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター

# 写 真 图 版



写真図版1 中曾根遺跡遠景



西方向より粗掘風景



遺跡中央部粗掘

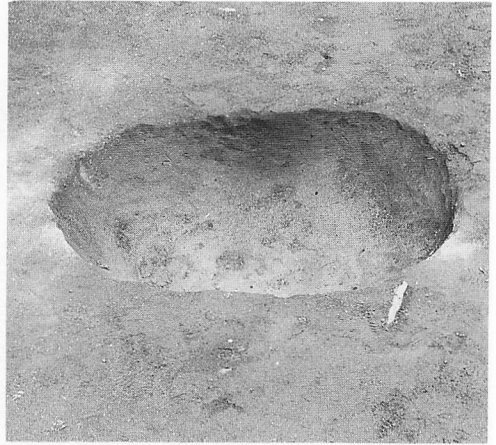


遺跡南側粗掘

写真図版 2 粗掘作業風景



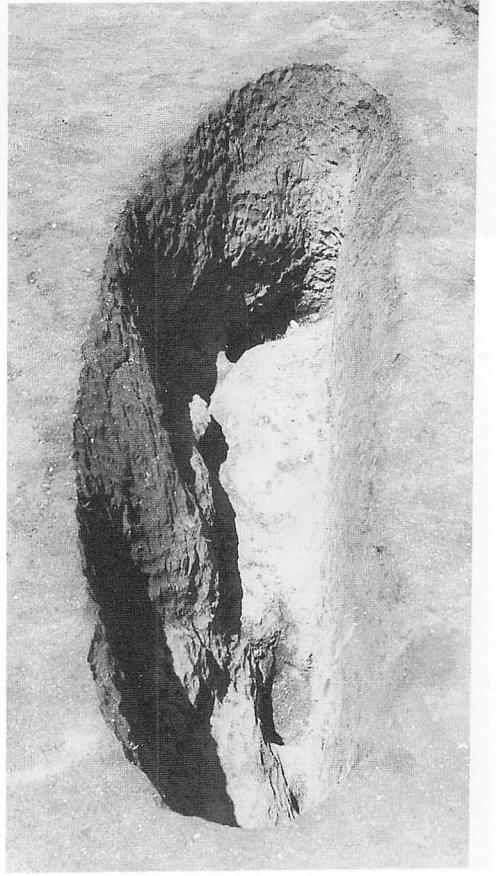
C II 土坑



J III 土坑



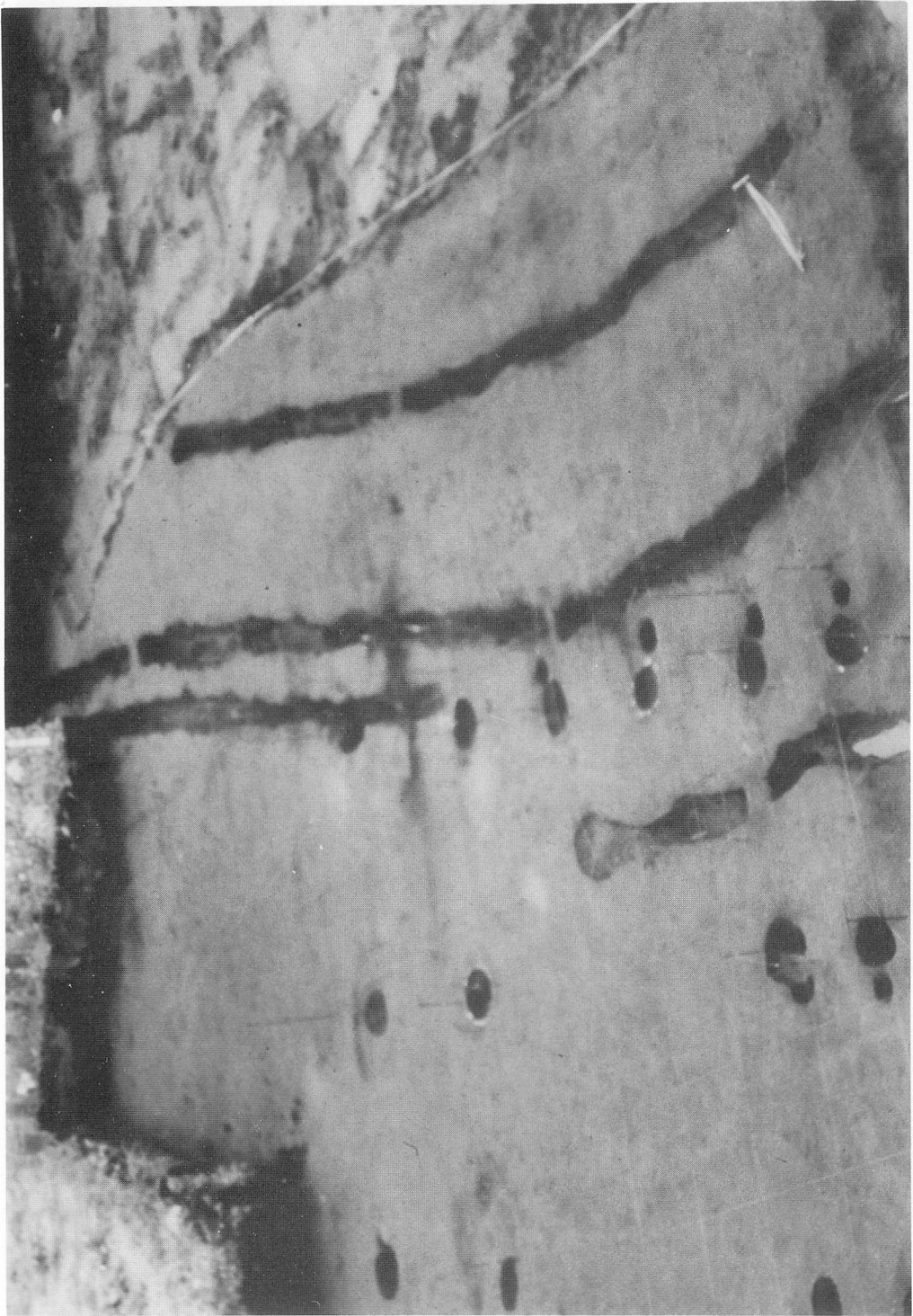
H II 陷し穴状遺構土層断面



H II 陷し穴状遺構完掘

写真図版 3 C II 土坑・J III 土坑・H III 陷し穴式遺構

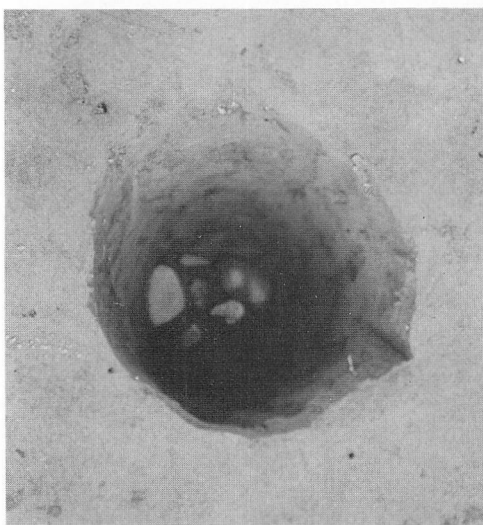




写真図版 4 1・2・3・4号溝跡



掘立柱建物跡全景

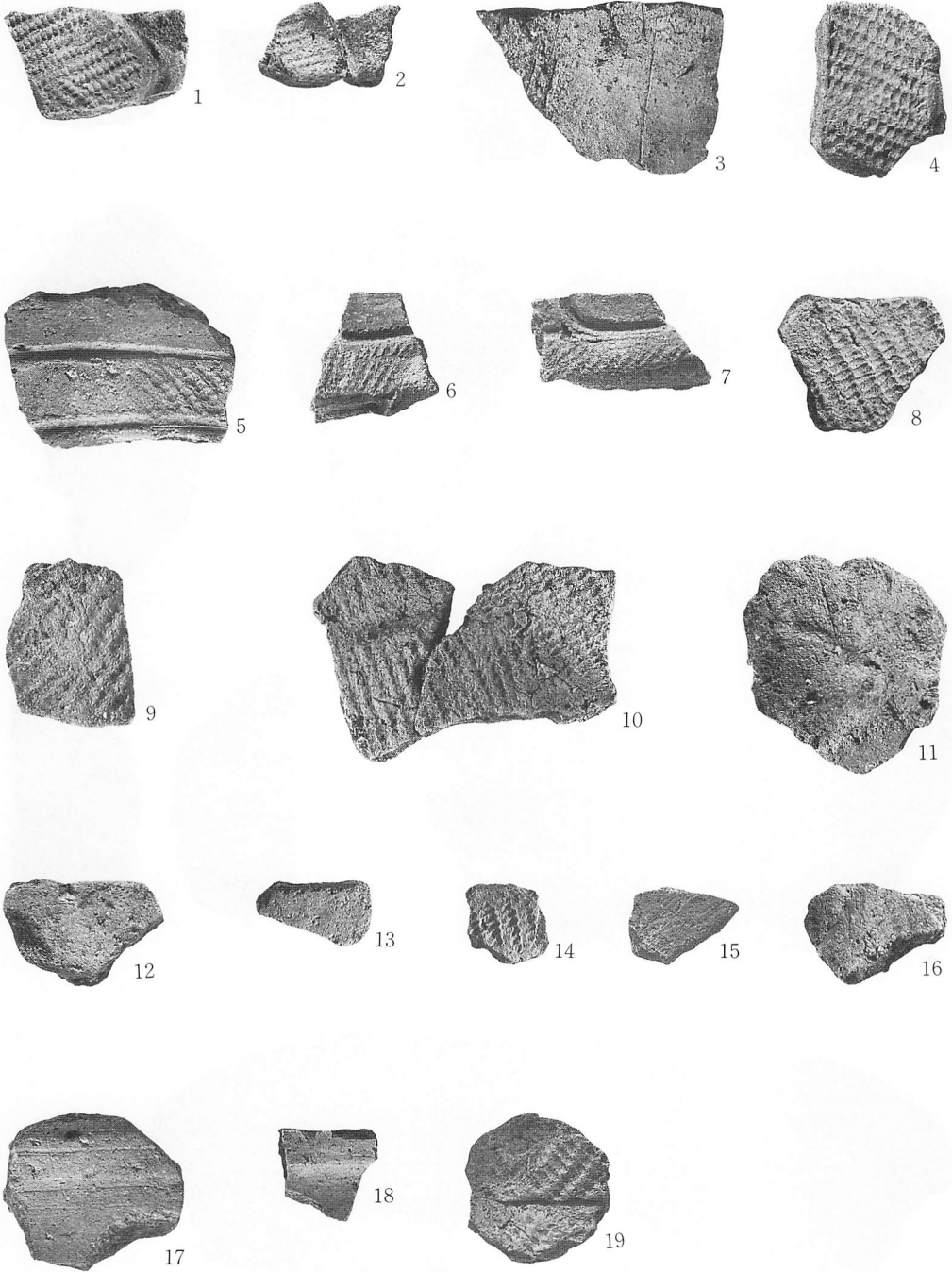


掘立柱建物跡柱穴 1

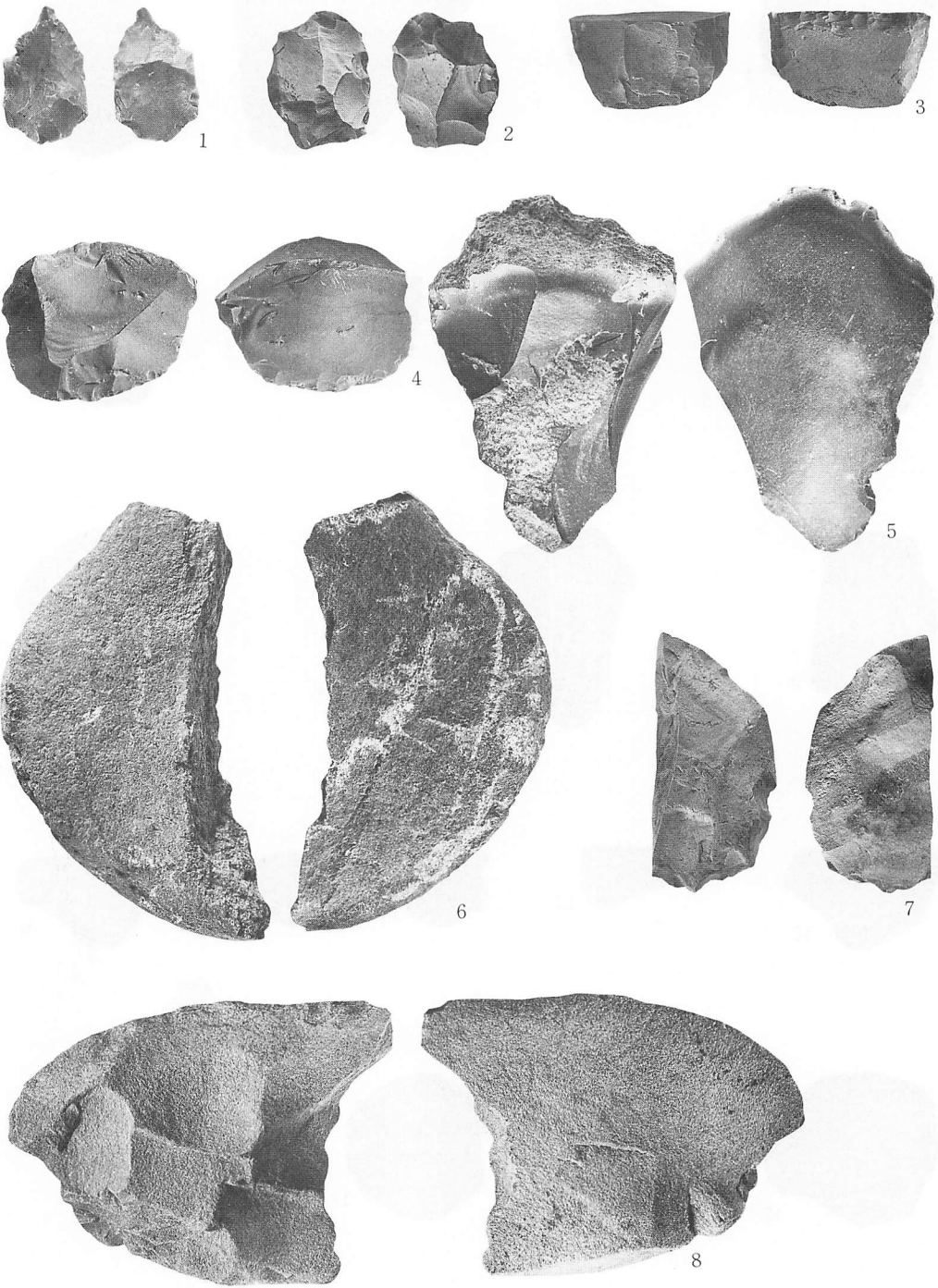


掘立柱建物跡柱穴 2

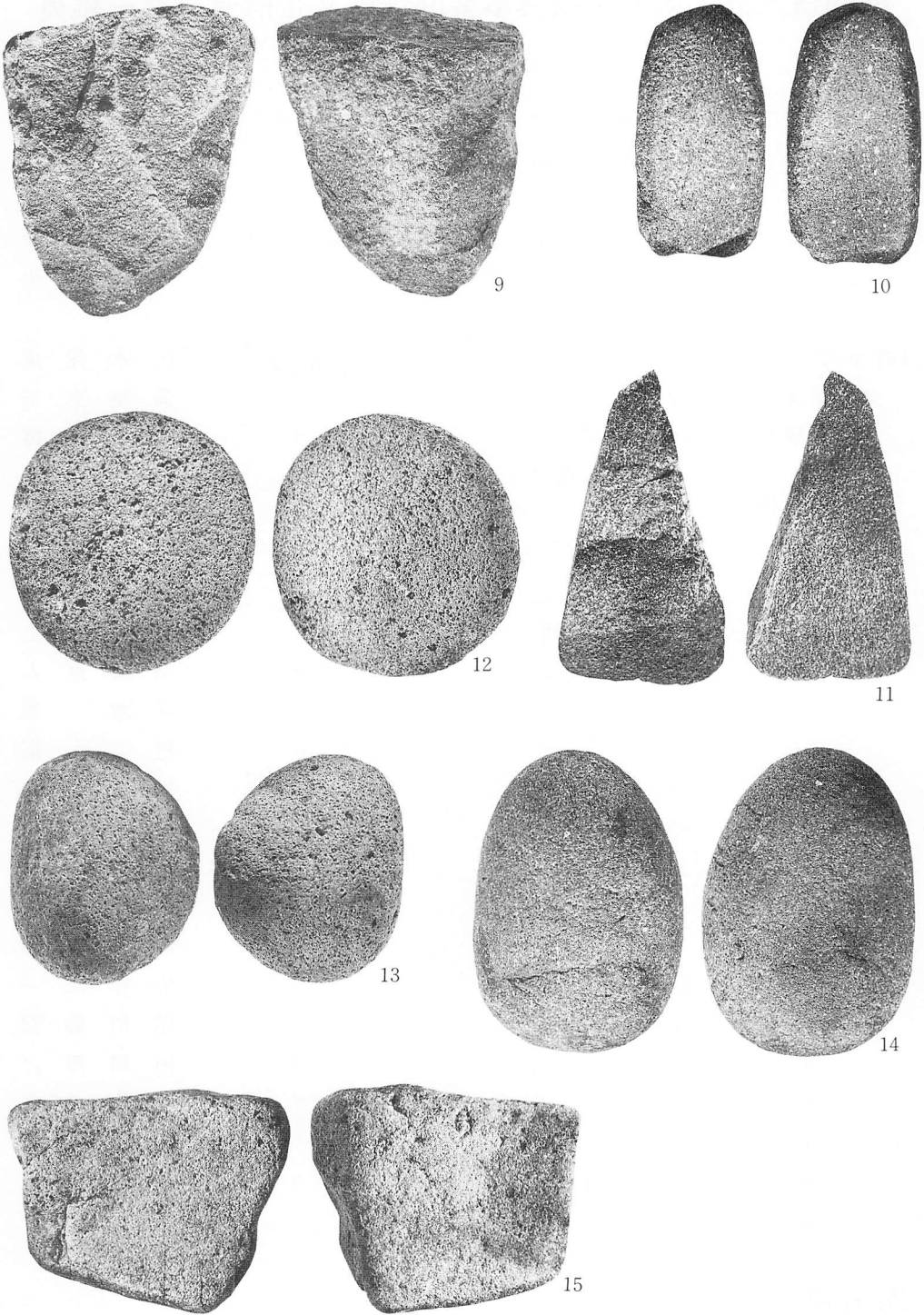
写真図版 5 掘立柱建物跡



写真図版 6 遺構外出土遺物(縄文土器・円盤状土製品)



写真図版 7 遺構外出土遺物(石器)



写真図版 8 遺構外出土遺物(石器)

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實		
副 所 長	高 橋 敬 明		
[管理課]			
管 理 課 長	澤 田 寛	嘱 託	吉 田 十 次
主 事	佐 藤 理	〃	野 崎 他 夫
〃	久保田 幸 恵		
[調査課]		文 化 財 専 門 調 査 員	松 本 建 速
調 査 課 長	鈴 木 恵 治	〃	笹 平 克 子
課 長 補 佐	三 浦 謙 一	〃	花 坂 政 博
〃	高 橋 與 右 衛 門	〃	佐々木 務
主任文化財 専 門 調 査 員	菊 池 強 一	〃	金 子 昭 彦
〃	渡 辺 洋 一	〃	濱 田 宏
〃	高 橋 正 之	〃	阿 部 勝 則
〃	工 藤 利 幸	〃	星 雅 之
〃	中 川 重 紀	〃	羽 柴 直 人
〃	佐々木 清 文	〃	高 木 晃
〃	高 橋 義 介	〃	村 上 拓
文 化 財 専 門 調 査 員	齋 藤 實	期 限 付 専 門 職 員	鎌 田 精 造
〃	千 葉 孝 雄	〃	柳 田 磨
〃	川 村 均	〃	千 葉 悟
〃	鈴 木 貞 行	〃	高 橋 英 樹
〃	伊 東 格	〃	溜 浩 二 郎
〃	吉 田 充	〃	佐 藤 修 一
〃	齋 藤 邦 雄	〃	稲 垣 雅 宏
〃	神 敏 明	〃	田 畑 博 之
〃	高 橋 一 浩	〃	八 重 座 の り 子
〃	小 原 眞 一	〃	杉 沢 昭 太 郎
〃	酒 井 宗 孝	〃	平 澤 祐 子
〃	鎌 田 勉		
〃	小山内 透		
[資料課]			
資 料 課 長	村 松 義 夫		
主任文化財 専 門 調 査 員	駒 嶺 高 幸		

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第204集

中曾根遺跡発掘調査報告書  
関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001・9002

FAX (0196) 38-8563

印刷 (株)杜陵印刷

〒020 岩手県盛岡市みたけ2丁目22-50

TEL (0196) 41-8000